

きる事は害悪であつて無意味である。吾々は時として家庭の爲にも生き社會の爲にも生き人類の爲にも生きる事は妻が夫を離れて女性としての意義がない事と同一である」と云つてゐる。

トルストイは理性を重んじたが故に此の理性を以て吾々の個人的生活乃至動物的生活を改善しなければならぬ事を主張してゐる其處に眞の彼の人間生活があつたのであ。

一個人のみの幸福は物質的のみの幸福である。此を求めんとする心は私共の動物性であつた。アダムとイブの場合も今日の文化に浴する私共の場合も同じである。嘗てトルストイが其の若き心から自己のみに生きてゐた時彼の心裡には動物性のみが呑めいてゐた。彼の反省は個人的動物的存在の繼續か不可能である事を知覺せしめ茲に初めて彼に貴重なる理性がめざめたのであつた。ラスキンには斯の如き悩が少かつた。彼には人間の誠の生活が其の初めよりして理性と動物性との混一體として表はれてゐたのである。

トルストイには哲學的の考察は後の問題であつた。勿論彼は其の人生論に於

て彼一流の思索を行つてゐるのである。彼が充分に知つてゐる所のものは彼自身的生活であつた。

而して個人的幸福に對する憧憬と其の幸福を支持する理性とは彼の動物我と共に彼の認識觀に表現したのである。彼は彼の人生に於て一動物なる事を自認した。而も此の動物我を理性の法則に従屬せしめて到達し得る幸福に對しての道程が彼の所謂人生であつたのである。

ラスキンは個人一個人のみの利益に生命があり得ない事はよく知つてゐた。只彼は其より生ずる道徳論によつて彼の自然的に所有して居た動物我なるものを沈黙の中に抑制してゐたのである。彼の健康はトルストイに比して劣つてゐたが故に飽く迄も靜かなる動物性であつたのである。

先にトルストイは實感に敏であつて哲學的考察に稍々劣つてゐた事を私は述べたけれども私はラスキンを過信する故に或は少しくトルストイを多少動物性の權化と云つたのである。併しトルストイとても確に理想家であつた。個人性を捨てると云ふ事を餘りに良く知つてゐたが故に此の個人性を如何に統御する

かに就いて悩んだのである。人間には理想がある。やはりトルストイに於ても其の理想は動物我の満足から獨立したあるもの、動物我の幸福を放棄してより大なる幸福の存在を認める點に存したのである。

ラスキンに於ては道德が愛であつた。愛を離れて美もなく徳もなかつた。美は徳であり徳は愛であつた。ラスキンの教訓は抽象的に之を見る時トルストイの教訓と五十歩百歩である。

トルストイに於て眞に合理的な幸福を齎す所の生活は理性の活動を必要とした。そして彼に於ては理性の發動共のものが愛であつた。

彼に於て世俗的愛は將來のより大なる愛の爲に現在目前の愛を犠牲に供する場合もあつた。乍然彼は誠の愛を以つて只現在の活動であると斷じたが故に誠の愛に將來がなくなつた。合理的な現在に活躍する愛此がトルストイの愛である。愛は理性から生れると云ふ彼の歸結である。

ラスキンは眞の愛を以て生命共ものとした。彼は理性の愛を説かなかつたけれども祝福された無限の生命を信じたのである。人間が幸福なる愛を享受せん

が爲には美と徳とを讃美せねばならなかつた。彼は晩年に於て魂ののびやかな少年の心を愛したが彼は小兒の心に恵まれた愛を以つてトルストイの太陽の如き理性の愛に換へたのである。

何時の場合に於てもラスキンとトルストイは同形のプロフェットであつた。

冷い雪の日にあの空漠たる淋しい村で悶え死んだトルストイの最後の悲劇は生涯を通じて戀に破れ妻に別れて淋しく眠つたコニストンの秋のラスキンの詩に何となく似つかはしい感じがする。死は凡ての人に平等である如く此の二人にも同じ死の復活が訪れてゐた。死は存在しないと叫んだトルストイの自信が死と生命は同じだと云つたラスキンの思想とに合一した事は誠に不思議と云ふべきである。

キリストは遠い昔に死んだ。釋迦も遠い昔に死んだ。彼の肉體上の生命はほんとに短かかつた。私共は肉體上の彼等に就いて明らかな觀念を持つてゐない。併し彼等の愛すべき生命の力此の世に對する彼等の關係は其を吾々の心の裡に受入れ其によつて生活して行く幾百萬の我々に今日も尙働いてゐるのを思ふ時

人としてのラスキンとトルストイは全くなつかしい姿でなければならぬ。

二 ラスキンとトルストイの宗教観

偉大なる藝術家としてのラスキンの一面には偉大なる宗教家としてのトルストイに似つかはしい點が少くない。

ラスキンは宗教家と云ふよりも宗教を蔑外視しない又宗教を尊敬した藝術批評家として價值があつたのである。

トルストイの生涯に於ては前半世を以て藝術家とし後半世を以て宗教家とする事が出来た。併し或る批評家はトルストイに於ても宗教家と藝術家とを同時に其の全生涯を通じて對立せしむる事が出来るのであると云つてゐる。況んやラスキンは彼の前半世を以て藝術批評家とする事も出来なければ後半世を以て信仰生活に這入つた宗教家と論ずる事は出来ない。私は先に人としてのトルストイの中に彼の根本思想として理性と愛とを發見したのであるが此の彼の理性と愛とはトルストイの宗教上の根本思想となつてゐるのである。

ラスキンの宗教とはどんなものであるか。トルストイは眞の宗教を以て人間が其の周囲の無限の生命に向つて理性及び智識に適合する一つの關係であると云つてゐる。そして宗教は人間の生命を無限永久に結びつけ彼の日常の行爲を指導するものなりと云つてゐる。ラスキンは格別に宗教を以て人生に必須のものである事を云つてはゐない。宗教は時代と共に推移し衰退する事もある。

殊にラスキンの周囲にあつては英國のキリスト教なるものが彼の眼に最も不快に映じたのであつた。トルストイも云ふ如く人間が最早や宗教を要しなくなつた時は宗教共ものが最早や人間に不必要になつたからではなくして古い宗教で満足が出来なくなり新しい宗教を求めんとするからであるとラスキンも云つて居る。

試にラスキンの千八百六十八年アイルランドのダブリンにあるローヤルカレッジオブサイエンスに於てなされた「神祕の人生と其の藝術」なる彼の論文を見るに彼の神祕的な宗教観がまさしくと私共の心眼に表はれるのである。

「私の思想は私の言葉と共に段々變化して來た。青年時代に若しも私が世の

中の人に幾分でも感動を興へたものとすればそれは重に有形的の雲や大空の美しい色彩に憧憬した情熱の爲であつたらう。

併し私が今日此頃望む所の情熱は此迄のものとは全く異つた雲の形體や色彩の美である。そして其の雲と云ふのは聖書に所謂「汝等の生命とは何であるかそは暫くの間表はるゝも忽ちに消え行く水蒸氣の如し」と云ふに外ならないのである。

何人でも中年から晩年に達する迄には人生の美しい色どりの雲から忽ちに日光が消え失せて人生と云ふ建造物の餘りに夢の如く脆く露の如く果敢ない事を悟つて心行くばかり悲痛の感に打たれるであらう。併し此の遺瀨な悲痛の間にも吾々の人生が雲の如くであるけれども尙又神秘的な點で雲に似たものなる事を悟り人は空しい影の如くに歩んで思ひ悩む事誠に空しからざることはないのであると云ふ聖書の句其儘なる事に想到する人は必ずしも全部とは云はれないのである。如何に吾々の情熱と貞操とが高尙であるにしても人生を大空の雲に比した嚴肅なる力と云ふ意味に於ての徹底

した考に到る人は誠に少いのである。

私共の靈魂の雲には電光よりも強い火と雨よりも貴い美がひそんで居る。

私共は相應の年輩に達して段々と起り来る變災に馴れ易く法律や美術や宗教上の信條等の中に表はるゝ多數の變化に對してほんとうに正當な判斷を下し得る人は定めし人生の誠の意義を考へて悲哀と嚴肅に泣く事であらう。私の生涯が私を失望させればさせる程人生の行路が益々嚴肅に益々不可思議なものになつて來たのである。

ポーブは次の如く歌つてゐる。

意見は様々な光をもて

此の世を美化する綾雲を

いやが上に彩る

幸福の不足は希望が此を補ひ

理性の空虚は誇が埋むる

智恵が破るれば希望が建設の役目を果し

愚な者の盃には何時も歡樂の泡沫が浮ぶ

一つの快樂が逝けば他が此に代り

そして一の虚榮も決して無駄には與へられない

ポーブは人生の虚榮は決して一つも無益に與へられないと歌つてゐるが私は寧ろ彼の反對に「空なるものゝ裏面にも空ならざる或物が存在してゐる」と云ふ事を感じるのである。……

臚ながらも人間の死すべき此の生命と云ふものは何時の時か必ず無限の不死の中にとられ行くべき約束があることを嚴肅に信仰するに至つた。

私は不思議な神祕を知つて居る。其は私には來世と云ふことが不可解であるからである。諸君は天國と云ふものを信ずるか地獄と云ふものゝ存在を肯定するか此れ實に人生に於ける一つの神祕である。

キリスト教時代に當つて此の深い事實を知り此を宣傳するに努めた最高の代表者はダンテとミルトンとであつた。

キリスト教の信仰が人の心に廣く通ひて一千五百年も経過した時我が英

國にはシェークスピアを生んだのである。此のキリスト教の大詩人に於ては神は正しいそして若しも我々が不徳を恣にするなれば其は反つて我々を罰する鞭となると云ふ運命の嚴肅なることを教へたものである。今日の文明生活に於て間違のない宗教は真正にして簡單なる實行の上に建設せられなければならない。」

斯の如くラスキン^{ラスキン}は現實の宗教を尊重した、自然の神祕をいやが上に高調した彼も宗教に於ける無駄なる神祕説は之れを排したのである。神祕は誠に手近かいところにあつた。

遠い神祕は自然を通じて人間の眼前に横つて居る。此の神祕を通じて道徳も藝術も宗教も生れたのだ。

古^{キナ}るい宗教は誠に神祕的であつた。然し夫れ等ですら歴史の事實は彼等の僧院^{ステ}の中にあつて生産が營まれたではないか、ブドー酒やチーズは北海道の修導院でも作られて居る。

現實の力は實に鋭い、神祕の幕は時として此の現實の偉力に壓倒さるゝので

ある。宗教の價值も此の現實の世界を離れては存在し得ない。

ラスキンによれば現實は必らずしも俗悪ではない、現實の人の子にも宗教心はある。徒らに神祕と云ふ美しい文字にかくれて現實の價值を破戒してはならないのである。

神祕は自然のまゝに價值がある、現實は現實として價值があるのだ。

ラスキンは其當時のキリスト教の状態を見て宗教の墮落の事實を多量に指摘した。トルストイは誠の信仰と墮落せる宗教との間の主要なる區別の一つとして誠の信仰が神に仕へ神の意志を成就しなければならぬと云ふ要求を感じる事にあつたが偽の宗教に於ては人は神に向つて犠牲や祈禱の返禮として神が人の欲する所を充して人間に仕ふべき事を要求する事にあつたのである。わけてもキリスト教の最も主要特質とする所の人類平等の原理を無視せんとする事の如きに至つてはラスキンの最も痛嘆した所である。

理性と宗教とはトルストイに於て離すべからざるものである事はラスキンが宗教と道徳とを混一せしめたと同一である。我々の理性はラスキンにあつても

人間をして宇宙無限に對して彼等の關係を定める力であつた。

理性の本來の仕事はトルストイに於て神に對する人間の關係を定める事及び其關係に順應した活動を指導する事にある。

然るに現代に於ては理性の本來の仕事と云ふものが神に對する人間の關係を定めず我儘勝手に自らの感情に任せて行動して置いてから後に其の行爲を肯定し不合理なる理論を作製するのである。

トルストイは彼の人生論に於て理性の悪用の最も顯著なる一例として現代の哲學者科學者を非難してゐる。

ラスキンはトルストイ以上に惱める天才であつた。彼の生涯は苦惱と云つても良い。彼の著作を見よ。彼に於ては過去の苦惱は現在の苦惱よりも深刻であつた。ショーベンハウエルが「狂氣の原因は苦痛からである過去の苦痛から逃れん爲に記憶の連鎖を絶ち切らんが爲に狂人になるのである」と云つたのは誠に興味多い事である。彼に於て過去の苦惱とは現在の意識の中に存する過去の事柄に於ての惱であつた。人間の病氣人間の貧困は裏面にひそむ苦惱の深刻なるも

のである。私共は人類共通の苦惱を忘れ勝ちである。人類共通の苦惱同じ運命に沈む人間の多いこと此の苦痛を精神的にも物質的にも改良し救済せんとした者はラスキンである。

彼の宗教は茲にある。

藝術は人類の苦悶を訴へる叫であつた。

ラスキンの宗教は人類の苦悶を訴へた叫であつた。

偉大なる藝術は偉大なる苦惱より生れたものであり眞の宗教は惱の宗教であると云つたトルストイと一般である。

宗教の智識に乏しい私がラスキンとトルストイの宗教上の原理に就いて説明する事は不可能である。況や其の教義經典の相違教狀的神學の批評に至つては私は只沈黙せねばならぬ。

私は次に *Time and Tide* の第八信中のラスキンの言葉から神學上の聖書に對する議論に就いて少しく記してみたいと思ふ。

ラスキンの著書中には豊かなる又よくリファインされた聖書の文句が記され

てある。

其の經濟學上の理論の中にも聖書中の引用句の多い事はトルストイ以上である。

私が種々の原理を述べ自らの説を主張する時度々聖書の句を引用したからと云つて其は私の手段を築く爲に宗教的コンクリートをかため様とするわけではない。然し乍ら私もかね／＼知つてゐる通り此等の經濟的論文を読む人に對して不快を感じしむると云ふ事は他の多くの事實と共に「英國の一般民衆が彼等の崇拜する書物に對して現在どんな心持を抱いてゐるか」と云ふ事實を證明するものとして私の貴兄(勞働者トマスディックソンのこと)に向つて一應考へて貰ひ度い所である。此の心持は此を正直に検査して私が聖書の文句を此れ以上引用する前に先づ貴兄の爲に明らかにしておかねばならない事がある。聖書の神學上の議論に就ての凡ての理論は此を次の四つに要約することが出来る。

一 現在聖書として傳へられてある書物の一言一句が盡く神の示し給ふ所

であり其の一字一字が神の言葉であると云ふ説——此説は勿論一理ある説であり又正直なものであるけれども普通に進んだ教養ある人々からは排斥されるものである。比較的學問のない近代の上流社會に行はれて居る。

二、聖書に字句上の誤のあることは此を認めておるが其の全體の内容の實質は絶對的眞實なものであつて此を語りし人も又此を書ける人も共に神のインスピレーションを受け人間に此を傳へたものである。そして何人でも正直に祈つて救に必要な眞理を此の中に求めんとする者は必ず誤りなく此の中に其を發見することが出來ると云ふ説——此の説は我國多數の善良にして公正な牧師の信する所であり宗教信者と自認してゐる善良な階級の人達は皆な此を信じてゐるのである。

三、聖書は此を書き編纂するに當つて必ずしも神の指導の下にせられたものでないから其の中に大なる誤のある事を認めねばならぬ。そして聖書中には他の人間の著述に於て發見さるゝ如く眞偽の錯交した叙述や

聖者の思想もまちつてゐるのである。然れども此等は全體として見る時一の神がある人間の一種族に對して爲せし所及び其後神がキリストと云ふ一個の人間を通じて彼等と如何に交渉せられたかと云ふ事に就いて忠實に物語るものである。而して此の中には誠のミラクルや死者の復活に對する正當の證據や次の世の生活等に關する記録等が記載してあると云ふ説——現に近代的英國思想の先驅者と稱する多數の人々の抱いてゐる所の解釋である。

四、聖書は人間の一種族が靈界との或る關係を發見せんとしてなし來つた最上の努力を記載したものであつて此は世俗の暗黒面の爲に迫害された情熱ある人々が經驗せる熱狂的な夢信仰等を表現せる只一つの信頼すべき記録であつて吾々の信仰に對しては埃及人や希臘人や波斯人や印度人等の宗教的思索並に歴史等と同様の價值しか持たないものである。然れど聖書は人間の理性が熱心に神の助を願ひ生より死までの間に集め得らるゝ所の最高の智識を集積したものであるが故に此等の記

録と同様に鄭重に研究しなければならぬと云ふ説——以上は最近半

世紀間の間重なる學者思想家達の提唱した聖書の解釋である。私が國民道徳或は其の品行上の重要な問題に就いて論ぜんとする時此の第四の思想家に對し次の如く云はんと欲するものである。即ち一千五百年の永い間歐洲の道徳的理性を指導せる此の聖書は人間の行動に就いて數種のシンプルなる法則を規定してゐるのであるが此は皆さんも知る如く色々の時代様々の國の凡ての宗教的著者及び宗教を排斥する著者が其の大切な點に於ては皆贊成の意を表して居るのである。

聖書は第一に高慢と淫蕩と貪慾とを禁止するそして人類の凡ゆる國民の大思想家は皆同じ様に此等の重大な罪惡を禁止してゐるのである。

聖書は又誠實と節制と慈悲と公平とを説くものであるが此等も亦凡ての偉大なる侯及人希臘人印度人の均しく讚美した所であつた。

誠實や節制や公平の行はるゝ間は一切の力平和、歡樂が營なまれ虚偽や淫蕩や貪慾の行はれる所に於ては必ず幾世紀を経るとも回復の出來ない

破滅が到來するものであると云ふ事をよく知つてゐる。

此の運命の大法則は吾々の神祕なる運命や歴史を通じて光と血の文字とを以て或場合には都市の城壁の上に或は廢址の上に記されてゐるのである。人間の純な本能を獎め人間の此世に於ける善徳に効力ある正義の大法を信奉する事は孰れの國の宗教的著述家も言明する所であつて而も吾々の此の聖書の中には主として來世に於ける一層善良な生活と正義とを獲得し得ると云ふ明かな希望に關連して説かれてゐるのである。

ラスキンは斯の如き理由を以て彼の社會經濟學上に關する著書の中に屢聖書の文句を引用したのである。

私は先に述べし如くトルストイの宗教は福祉を現在の世に求むるもののであつて眞の宗教は此の世に於ける現在生活其のものにして利己的小自我的生活の拒否である理性の生活は彼に於て宗教の生活であつた。此の意味に於て個人的生活を尊重したラスキンは理性の生活を敢て高調しなかつたけれども救を未來に求めずして福祉を此の世に求めたと一般である。

イエスの教理を或學者は次の二様に見る。

第一は個人として又他人との關係に於て如何に生きべきかを人に教へる所の道德的及び倫理的體形としての方面である。

第二は人類は何が故に其の與へられた様式に生き共に反した生き方をしてはならないかと云ふ事を説明する所の哲學說としての方面である。

本來トルストイは教會に於けるキリスト教の神祕的な説教を排斥したものである故に彼は奇蹟などと云ふものを認めなかつた。

此點に於てはラスキンはトルストイ以上にキリスト教の此の誤まれた哲學的神祕的の教説に反對したものである。彼には教會や僧侶や將又此に屬する青年子女達がキリストの哲學的教理を自らの便利な様に氣の儘に解釋して此の教の中から個人としての又如何に生きべきかを教ふる所の道德的實際的本分を忘却せる事を歎いてゐるのである。

トルストイは次の如く云つてゐる。

イエスの教は光である。光は輝き闇は此を遮るべからず。人間は此の

導を拒否する事は出来ない。イエスの教は人間生活を圍む所の凡ての誤謬を輝すものであるからどうしても吾々は此に頼らなければならぬ。

人間はイエスの教を承認すべきである。此の教の與へる人生の哲學的解説は否定してもかまはない。彼の教理の力は人生の意義の説明ではない。生活指導としての其が與へる法則である。彼の教理は古き時代よりの凡ての豫言者によつて説教せられたる永遠の人生教理である。

イエスの教理の力は此の哲學說を實人生に適合せしめる所に存在するのである。

個人的生活を尊重したラスキンの宗教に關する私の説明は極めて貧弱なものであるけれども Unto This Last の序文の中に「神のつくられるものゝ中何か最も氣高きか氣高からざるか敢て言明せずとも吾人は尙正直なる人は目のあたり見うべき神の最善の作物の一なりと云つたポープの言は認むる事が出来る」と云々の言を賞味せば私の説明に勝るもの一層である。

ラスキンは其の藝術論に於いて無信仰なる近代人の自然に對する愛情の少き

を患へたものであつたが其の宗教に於ては餘りに神祕的なる近代人の誤謬に近き哲學的信仰を悲しめるものであつた。彼は美の爲の美を排し宗教の爲の宗教を排した。度々云ふ事であるが道を離れて宗教はないのである。

ラスキンは嘗て *Sesame and Lilies* の中に神の園とは酒と肉の快樂ではなくて正義と平和と精靈の歡とである。そして斯の如き歡は必ずしも教會に行つたり讚美歌を歌つたとして得られるものではない。時としては舞踏したり親しい友とは笑戯を云ふのもよからう。或は又時として身分相當な私有財を持つても良ろしいし又相當な財を他人に施したりする事からも得られるのであると云つてゐる。彼は天國の樂しみを以て特殊の人にのみ特別の恩寵があるわけでもなく他人を墮しゐれてまでも特殊の人ばかり世に成長するわけでもなく又一般の人の勞働から特殊の人を免れせしむるわけでもなく又他人が悲痛に惱んでゐる時特殊の人のみ放縱するわけのものでもないのであると叫ぶ。

既に私が述べた如くトルストイはラスキンに比してイエスの言葉に對しては只正直に此を享受してゐるのである。併しラスキンに於ても神學者や教會の僧

侶等が勝手な註釋をしてイエスの詩の言葉を毒する事を歎じてゐる。
次の言葉はラスキンの宗教上の教義や字議に對する解釋の反面を語るものである。

何等のわきまへもなく宗教上の教義や其の思索にのみ耽るのは危険である。私は決して凡ての人が其の教義を研究して自ら其の深い意味を發見する様に其の力を用ひよと云ふのでない。只其の意味の明瞭なものも自分で又此を明瞭に理解する様に努めなければならぬのである。我々は互に自分が如何なる態度を以て宗教に對してゐるかを嚴肅に考へなければならぬ。決して形式的に宗教上の義務を守るのは宜しくない。又自分の空想を楽しませる爲に讀むと云ふ事も正當ではない。

自分に理解し得られぬものは其の理解し得ないと云ふ事を明に語るが宜しい。

キリスト教の眞の精神は其の聖書の中にこもつてゐる。此を素直に解釋せんと努めた者はラスキンとトルストイである。

トルストイが彼の宗教の信条として信じた、一、怒る勿れ二、姦淫する勿れ三、宣誓する勿れ四、悪を以て悪に抗する勿れ五、人の敵たること勿れと云ふ五個の戒律に就いてはラスキンも均しくイエスの言葉其儘を實行せよと奨めてゐる。キリスト教の教會に對するトルストイとラスキンの攻撃論は同じ傾向を持つてゐる。

又教會に屬するキリスト教信者に對しては均しく此の二者が警告を與へてゐるのである。教會の神學の説く所は其の説教上に於て此の世の生活の否定であつた。此の世の人間の生活は決して誠の生活ではない。實在の人生は墮落した悪い生活であつて墮落せる此の世の否定は罪のない永遠なる個人的生活の幸福を意味すると云ふキリスト教の教會に於ける教義は他面に於て眞理ある如く思はれるがトルストイとラスキンによれば「貴重なる人間生活を毒するもの」であつた。

ラスキンは自然を楽しんだ如く又現實の世を深く愛した。そして人間の自然に打克つ事よりも自然と共に楽しく暮すことを説いたものである。彼の宗教觀

も現實を離れて存在し得なかつた。トルストイの宗教も救を未來に約束せず天の福祉を現在の世の中に與ふる所の實際的宗教であつた。誠に宗教は此の世に於ける現在の生活其ものでなければならぬ。そして現在の宗教生活は即ち人の子の生活トルストイに於ては理性の生活であり理性の生活は愛の生活でありラスキンにあつては道德の生活であり道德の生活は愛の生活であり藝術の生活であつたのである。茲に彼等の宗教的永遠の生命が存在した。

三 ラスキンのトルストイの戀愛觀

茲に私が戀愛觀と云ふは單に兩性問題であるのみならず多少彼等の宗教的部分にも這入る事と思ふが男女問題殊に性慾問題に就いてはラスキンの言葉が私の心裡にトルストイ程數多く殘されてゐない。

私は自らの知れる範圍に於て其は極めて狭いものであるかも知れないけれどもラスキンの言葉を通じてトルストイの男女觀に結び付け度いと思ふ。

A 婦人とは何ぞや

ラスキンもトルストイも所謂新しい女は嫌であつた。

ラスキンは嘗て婦人は妻であるか然らざれば寄生蟲であると云つて居る。それ程婦人と云ふ者を男に結び付けたものであり女權などと云つて男より何物か引き離れんとするものは大嫌であつた。

女權と云ふものに就いてのラスキンの感想はラスキンの *Sesame and Lilies* の中に散見せらる。婦人と云ふものは高等教育によつて如何なる部類如何なる種類の女權を男子に向つて獲得する事が出来るものか。又如何なる範圍まで其を使用する事が出来るか。ラスキンは先づ根本問題として次の二項を掲ぐ。

一、婦人の平生の力が如何なるものであるかと云ふ事を第一に知る必要がある。然らざれば女權を決定する事が出来ない。

二、婦人の日常の義務とは如何なるものであるかと云ふ事を知らなければ教育が如何なる範圍まで婦人の義務を擴大せしむる事が出来るかと云ふ事を考へることが出来ない。

女性と男性との關係に就いて殊に知識や道德に對して如何なる程度迄此を體

得し得るやと云ふ問題に就いてはラスキンも深く論じてはゐないけれども婦人の使命及び權利が全く男子の權利及び使命と分離し全く調和する事の出来ない要求を持つてゐると云ふ事に就いては彼は全然否定したのである。同時に婦人が夫の影法師であり徒屬物であつて奴隸的屈從を敢てする所の説を以て最も惡なものとしたのである。然ればラスキンは婦人の意志及び道德が男子の意志及び道德に對して如何なる力を有し如何なる義務をなすものであるかと云ふ事に就いて彼の所謂調和的思考を用ひたのである。

本來トルストイの女性觀には東洋的な又佛敎的な點が多かつた。婦人參政權などを排斥したトルストイに於ては又男女平等の問題に就いて此に何等の同情も持つてゐなかつた彼にあつても必ずしも男尊女卑を主張するものではなかつた。

トルストイは母としての女性に對しては此を生活の眞義を知れるものとして敬虔なる讚美を表したのである。

ラスキンはシェークスピアやスコットやダンテなどの女性觀を通じて婦人

は男性の墮落を救ふ宗教的力を持つてゐると云つてゐる。彼は一例として純潔と献身とが尙ばれてゐた中世の世のキリスト教の全盛時代に於ける婦人の力を讚美してゐる。そして

「靈魂の甲冑は此を婦人の手を以て着せるに非んば決して緊着すべきも

のでない。男子の名譽は婦人が此をゆるく着せる時に地に落ちて終ふ」
と云つてゐる。是れ即ち彼の婦人の平生の力を指すものである。ラスキンが中世の武士と婦人との關係を以つて單に相愛の事實が熱情的な想像上の崇拜からではなかつた事を力説してゐる。彼によれば青年を監督し教訓し指導する所の者は何時も婦人であつたのである。婦人は男子に對して何時も忠實賢明な忠告者であり正義と純潔の標本となりたとひ他を救済し能はざる場合でも尙其罪を清め慰むるものであるとしてゐる。

トルストイは人間の墮落を救ふは純潔な婦人の力に俟つのみと云つてゐる。斯かる婦人は愚かにして詐偽的の行動より其の夫を救ふのみならず其の子供等に對しても怖れと嫌を以て惡より監視するものである。來らんとする時代の後

繼者たる子供を以て最も神聖なるものとし自分は其の全身全靈を獻げて人類に與へられた此の務をなすのである。トルストイは彼女を讚美して「人類を支配し彼等を導く星座の役目をなすもの」とするのである。

ラスキンは戀に破れた最も不幸なる哲人であつたが而も尙婦人の美德の讚美者であつた。そして彼は婦人の美を譬へて美しい結晶と云つた。次の言葉はラスキンの體驗により生じたものである。此の中には婦人の美を讚美し乍ら同時に婦人の短所を指摘してゐるのである。

我々男子は決して婦人の様に氣が變り易くない此が爲に我々男子は單調で面白くない。

婦人は洵に美しい結晶である。又氣の變り易い所も結晶其儘である。其の爲に様々の變化を生じて多くの人の力を引き付ける力を持つてゐるのである。

俗語ではあるが男心は秋の空と云ふ事がラスキンに於いては女心は秋の空であつた。私は敢て詭辯を弄しない。率直に彼の言葉を *Epithets of Trust* の中に發見し

たまでである。

ラスキンの妻はラスキンを去つて畫家ミレーに走つた。彼程不幸な結婚を味つた者はない。彼の戀物語に就いて私は敢て物語らぬけれどもミル夫妻やカーライル夫妻やブラウニング夫妻の如き温きものではなかつた。

眞正なる妻のある所には其の周圍には必ず家庭があるそして星の光は必つと彼女の頭の上のみ輝くであらう。

と叫んだラスキンの言葉を思へば何人か彼に同情せざらんやである。

ラスキンによれば男女兩性の優劣と云ふことは同一の事物に就いて比較すべきものでない事が考へられるのである。男女兩性は夫々他性の有せざる特質を有して其の相互に足らざる所を補足しあひ他の缺點は他の長所により補はれると云つて居る。

男性の力は活動的であり進歩的であり防禦的である。男性は活動家であり創造家であり發見者であり防禦者である。彼の知識は思索と發明とに適し彼の力は冒險を愛し正しい戦争や征服に適してゐるのである。

「女性の力は秩序や配合や決心には適する。彼女は事の性質や物事が如何に要求せらるゝかと云ふこと又正しい物事の位置を見分ける事は男性に優る。彼女は讚美する事を知つてゐる。誠の女性のある所に平和の光がある。星の光は必らず彼女の頭に輝いて苟くも眞正な妻のある所には必ず良き家庭があり縦令ひ彼女の足下の光は夜の冷い草の葉に宿る螢の光の如くであるとも其の溫和なる光を家庭なき人々にまで投ぐるであらう。」

カーライルの妻はラスキンの讚美した一個の女性であつた。彼女は己を謙抑するに賢明なる婦人であつた。其の賢明とはラスキンの所謂「自己を主張せんとする賢明でなく」自己を謙抑する賢明であつた。自ら「夫の上位に坐せんとする賢明ではなく」夫の側を離れないと云ふ賢明であつた。高慢と偏狭とは彼女を去つて情もあり熱もあり優に美しく變化もあり融通もきき而も控へ目勝ちな賢夫人であつたのである。

以上述ぶる所によつてラスキンの婦人とは何ぞやに就いては稍述べ盡せしつゝも有りである。

彼は人生の藝術教育家とし最も偉大なる事績を遺した所であるが婦人の教育に就いても相當の記述があるから次に其の概要を記しても無駄ではないと思ふ。彼によれば婦人に對する人間の第一の義務は健康を保持し其の美を完全せしめんが爲に身體上の鍛錬と運動とを與へる事であつた。婦人美の要素はラスキンに於ても其の活動的なる體力美であつた。自然の喜は何時も生々とした生命になければならない。人を生々せしむる感情は喜の感情でなければならぬ。彼はウオーズウオーズの詩「彼女は喜の天使」と云ふ詩より抜き書して次の如く掲げて居る。

私は此の自然兒の掟となり刺戟となり

彼女は私と共に

岩屋や平原や地や天や

沼地や東屋の中に棲み

の心を勵まし或は抑制する

人を生々させる感情は悲しみの心の中の誠の喜の感情でなければならぬ。一人の婦人を一人の男がほんとうに幸福にせしむる時其の婦人は其の男子に對して生々した生命の喜を感じしむる事が出来る。善良なる婦人の自然性に少しでも制限を加へ其の愛情や努力を抑へる時其の無邪氣な眼からは光が消え失せ其の氣高い顔からは輝が去り圓滿と幸福と愛敬と若々しさとは全く彼女より去つて終ふのである。

「婦人美の要素は道德的活動と優美なる體力とに俟たなければならぬ。

而して彼女の身體的自由は此に伴ふ心の自由を必要とする。此の自由なくして美は生れないのである。

ラスキン

⑤ 第二にラスキンが婦人の教養に對する必要な事項として掲ぐるものは婦人の本來の正義の本能を確立し其の自然に恵まれた愛の働を活動せしむるに適當な凡ての智識と思想とを提供して其の身神を充實せしめ調和させねばならない事であつた。

ラスキンの婦人に對して必要な智識とは何であつたか。

第一は男子の仕事を理解し同情し第二は此を補助し自らを犠牲にして彼を扶くる事であつた。彼は嘗て臺所の經濟と云ふ事を高調した日本の新しい婦人は定めし嫌な事であらう。

ラスキンの臺所の經濟と一口に云つてもそれは彼の婦人に對しての經濟的思想に乏しい事を歎じたものである。私に四人の姉がある。彼女等は相當の奥様であるが彼等の一人に河上博士の貧乏物語を買つて讀ませて見たがわからないと云つてゐる。私の妻に私の經濟的藝術觀の經濟的なる意義を問ふ人があらば

女は恐らくわからないと答ふるであらう。

ラスキンにあつては清潔なテーブルクローズをかけたかおいしい味噌汁をつくるのみが決して臺所の經濟ではなかつた。調理法は料理の上のみでなく富の上に財の上に分配の上に清潔な衣服と共に必要なものであつた。

ラスキンは婦人が明晰な思想を作る事の必要を説き自然の法則の意義と微妙なる藝術の價值とを心の裡に發揚する事により臺所の經濟を説いたのである。

ラスキンが婦人の教養に對する必要な事項として婦人の本來の正義の本能を確立し其の自然に恵まれた愛のはたらきを活動せしむるに適當な事として文學や藝術が女子の教養に必要な事を説いて居る。

彼は宗教殊に神學としての宗教が寧ろ危険な學問であつて婦人は此に對して充分慎まねばならない事を云つてゐる。

當時のキリスト教なるものがラスキンの眼には有害なものとして映じたに違ひない。

「自分自身が家庭の波瀾を引き起すべき心狀にあり乍ら主キリストの御導

きと此を考へ眞のキリスト教の家庭の神を自己流の最も醜き偶像(アイド
ル)即ち自分の意志のみを以て粉飾した偶像と化して終ひ夫たる者も時と
して妻から不信心だと呼ばれる怖しさから内々不愉快な心を抱いてさへ
も知らぬ振をしてゐなければならぬ様にしむけるのである。誠に信仰
を利用せる家庭の秘密である。

どんな階級の婦人でも婦人は夫の知つてゐる事を充分同情を以て了解せ
ねばならぬ。

夫の知識は根本的であつて又進歩的のものである。妻の知識は一般的で
日常の補佐の役をさへ務むれば良いのである。そして僅な知れる所を以
てしも婦人は只夫を扶ければ良いのである。半嚙りの思想や誤解で夫と
呼ぶ男性を困らしてはならない。

婦人は小さい時から知識の發達が早いものであるから其の神より恵まれ
た鋭敏な思想や聰明な才氣に加ふるに忍耐と質素な性格を以てし高尚な
純潔な精神を保つべきものである。

小女は花の如く自然に成長した。彼女は太陽の光線に當らなければ萎ん
で終ふ。又此に充分の空氣を供給しなければ丁度水仙の様に花瓶の中で
萎んで終ふ。

私の太陽の光線とは婦人に必要な知識であり充分の空氣とは自然に對す
る美の愛である。」

ラスキン

かである。ラスキンはウオータスコットを讚美した一人であつたが彼も天然の儘の美し
い自然の感化を尊んだものである。彼は人間が若しも自然の力を享有しない場
合に如何に貴重なるものを失つて行くかを説いてゐる。

佛蘭西のジャンダークを生んだ頃の教育はラスキン時代の標準に比べて極め
て低いものであつた。乍然ラスキンの純粹な哲學的見地から云へばジャンダ
ークの生れたドムレミーの泉や森は無限の廣さと宏大さを持つて居た。

重ねて云ふ。ラスキンの婦人の義務としては其の家庭に於ける秩序慰安愛情

であつた。

彼女は其の門の中に居て秩序の中心となり男子の悲しみを慰す藥となり美を物語る鏡となり又時には門の外に出づる事ありとも男子の家庭を維持する力進歩せしむる力此を防禦する力に對し誠の同情を以て歸らねばならなかつた。

「英國の婦人は嘗て男子の Gentleman に對して Gentle woman なる尊稱を持つてゐた。然るに近代に至つては男子の Lord に對して Lady なる言葉が一般に通づる様になつた。本来 Lord の意味は掟を掌る人の義であつた。Lady の義はパンを與へる人の意味である。

近代の女性が Lady たる事に對しては餘程戒心して取かゝらなければならぬ。善良な Lady の歩む所美しい花が咲く。此の花は彼女の足の踏みし後に咲くのであつて其の前に咲くのではない。彼女の足一度牧場を踏む時其の爲に雛菊咲くの義でなければならぬ。

嗚呼レディーの尊稱により女王の資格ある女性達よ貴女方は若草燃ゆる野邊を歩く代りに荊棘の道を掻き分けて其の足に觸るゝ柔かきものとは冷

い雪ばかりであることを知らねばならない。」

ラスキン

B. 妻及び結婚に就いて

トルストイの戀愛の解釋は戀愛を以て詩的な又崇高な人生の幸福と考へなかつたのが特徴である。彼によれば戀愛は畢竟肉慾其のものであり人間を下劣ならしむる動物的状態に過ぎないと極言した。

ラスキンは全く此と反對である。彼は或る意味に於て詩的讚美者である。従つて夫婦の關係に就いても眞の戀愛の必要を説いて居る。

「結婚と云ふものは凡て一時的の過渡の状態を不斷の務となし發作的の愛を永久たらしむる證書の如きものである。」

彼は世の人々が戀愛は情人相互の間にこそ成立すれ夫妻の間には成立することの出来ないものであると云ふ説を否定したのである。

男女問題殊に性慾問題に就いてはトルストイは其の著作を讀む人によつて察せられる如く人一倍悩んだ者である。彼はラスキンに比して強大な肉と此に對

する敏感な性情を持つてゐた。

戀に破れ妻に別れ剩さへ虚弱な肉體を以て肺患と戦ひしラスキンに果してトルストイ程の性慾を持つて居たかは私共の知る所でないけれども性慾に對する嚴肅なる結論並に貞操の理想に對するキリスト教的の解釋はトルストイもラスキンも全く同一であつた。

我々の社會に於て肉慾に根ざす所の戀愛を高尙にして詩的のものとなす文藝に對しては此の兩者は最も反對した哲人である。

ラスキンに於て純潔は勿論人間の理想であつた。此の理想は最も困難なるものであるが故に道徳的の理想として價値があるのである。キリスト教徒の理想は隣人及び神に對する愛であつた。神と隣人とに奉仕する爲に自己犠牲が必要であつたのである。

隣人及び神に對する愛の場合特に隣人が *Other-ness* である場合に戀愛觀と結婚觀とが生ずるのである。今少しく神に對する愛を考へずに人に對する愛特に異性に對する愛の事を考へて見度う。

戀愛を以て一種の宗教であると云つたゲーテの言葉はラスキンの戀愛觀に近くトルストイのそれに遠きものである。

人生の靈的表現や創造や眞理を愛する事や美に醉ふ事や凡ての労働に對する愛はラスキンによれば宗教に近きものであつた。然るにトルストイは此の同じ心持を持つてゐ乍ら戀愛を以て「肉體が誘惑する魂の上の罪惡」であると云つたのである。性交が健康にとつて缺く可からざるものであると云ふ理論に對してはトルストイは全く反對の立場にあつた。彼は人類が其の誤つた考から結婚と云ふ事が凡ての人によつて出來難き以上は男子に金錢の犠牲以外何等の義務も負はぬ様な結婚以外の性交に對して深く反對したのである。

結婚以外の性交と雖も場合によつては自然な事柄であると云ふ獎勵の理論に對してはラスキンすらも此に反對したのである。只ラスキンの不幸なる結婚生活から彼の體驗なるものは全く私共は其の全著述中に於て見出す事は出來ない。只彼の美しいラスキニアン風の文學の中に此に似た思想のあるものを散見するのである。

トルストイは人が若し禁慾して全く女子を知らないならば此は誠に人間として實行し得る最高の行爲であると云つてゐる。

次に少しくラスキンの結婚に就いての感想を詳記して見やう。

讀者は一八六七年四月十二日に記されたサンダンランドの一労働者タマスデイツクソンに宛てゝの手紙(『Time and Tide, 30th. letter』)の中に審しく記されてあるものを見れば此の拙き紹介を俟つまでもない。

「或る婦人が十六歳で婚約した。其後度々自分に有利な結婚の話があつたにも拘はらず十年の間やはり自分にも忠實であつた其の戀人に對して到頭貞操をたて貫いたのである。其の間二人の事情がどうしても結婚をする事が出来ない様な状態であつたからして二人は只幸福に相互の愛によつてたすけられ勵まされ乍ら人生に於ける別々の義務を各自に果して行つたものである。」

私は此を以て高尚な生活だと呼ぶ。そして此の事柄からどんな政治的國民的結果が生れるかを考へて見度い。

近世の人は稍々もすると結婚と云ふものを健全な法律によらず只單に需要供給の理を以て律し様として居る。克己心のない利己的な愚な青年男女は喜んで斯の如き結婚をする。そして必ず其の兩親の性質を遺傳する澤山の子供を生むのである。縦令ひ此の子供等が善い性質をもつて生れたとしても其の教育者としての父母は誠に愚な者ではあるまいか。

若しも私達の心眼を他に轉ずるならば他方に於ては多くの青年男女の中に誠に辛抱強く利己心も少く純潔を尙んで一生獨身で終つてしまひ又其の楽しい青春の時代を苦痛の多い犠牲的生涯に費し斯して男女相互間の最良の扶助と最良の報酬とは遂に禁ぜられてしまつて其の天より恵まれた慎ましい美德と慈み深き愛の徳とを親としての義務を發揮する事が出来ず終つてしまふのである。」

ラスキンは何等生理上の法則に迄立ち入つて述ぶる事はない。此の點はトルストイの方が其の生活上體驗上からして詳しく述べてゐる所である。

右のラスキンの記述によつても彼の思想が覗ひ得る如く彼は淫樂と純潔との兩

極端を嫌つたのである。彼は衛生上及び道德上に關する一切の法則は結婚の生理を以て初まるものだと言ひ凡ての淫蕩的な行爲はどれも醜惡にして致命的なものであると叫び殊に淫蕩的な結婚を以て最も甚だしく致命的のものとしたのである。

結婚を許すと云ふ事は青年を教育する上に於て彼等の受くべき後半期の一報酬である。」

ラスキンは斯く云つて青年や處女の眞しみある有徳な生活を奨勵し眞の結婚資格を得た男女に對しては其の結婚の日から一年間と云ふもの必要ある場合には其の家庭を支へる爲に國家が一定の支給をなすべきである事を説き富める者も貧しき者も人生の尊き第一歩に於て甚しき物質的差別のなからん事を希望してゐるのである。

トルストイは嘗て結婚生活たると獨身生活たるとを問はずどんな境遇にあつてもキリスト教及び其の弟子ポロの云つた如く出来る丈貞潔でなければならぬ事を云つた。又性交は人種保存上神聖な行爲であると云つてゐるが人には

人として従ふべき他の法則がありそれは争鬭全く相容れない愛の法則であり又更に一つの他の法則は生殖と相容れない貞潔である。此は動物と人間の重大なる區別であると云つてゐるがラスキンに就いては斯如き貞潔観がない。戀愛に耽る勿れとはラスキンもトルストイも均しく叫ぶ所であるが須く貞潔なれとはラスキンは云はなかつた。淺學の私は此の兩者の可否を論じ得ぬ。只ラスキンの説にのみ私は首肯し得るものである。

四 ラスキントルストイの藝術觀

此の問題は私にとつてつかみ所のない廣汎すぎる問題である。殊に彼等の深遠な思想に向つての批評論に至つては東洋の一學生が到底良く此を説明し得るものでない。

藝術は人間生活の苦痛の表現であると私は信じてゐる。如何なる場合に於ても私には宗教も藝術も悩みの結果だと思はれる。

悲観哲學は樂觀哲學に劣るものでない事を信ずる私は藝術家の生活を以て苦惱の生活であると信ずる。藝術家としてのトルストイも批評家としてのラスキンも其の生涯を通じて生活苦を味つた者ではなかつたか。

トルストイは貴族の子に生れラスキンは富豪の子に生れた。彼等の嘗めた人間苦は物質的に恵まれた奢侈の苦ではなかつたらうと思はれる。

ラスキンの一生を通じてミレー夫人の姿は永久に此を抱く事の出来な悲しみの幻であつた。

芭蕉や兼好法師の生涯はほんとに盡きない放浪の旅路であつた。

自然に歸れと叫んだルソーの實生活は超人を叫んだニーチェと共に誠に其の實生活は悲惨なものであつた。

湖畔詩人のウオーズワースは其の妹と共に淋しい生活を送つたではないか。

況やドストウエスキーやゴールキーは社會の迫害と戦ひあの花やかな放浪生活を送つたワイルドすら後に淋しい都の市中に死なねばならなかつたではないか。

私共の心には二つの心がある。一つは生活を餘りに享樂して苦惱を持たない心

である。此の場合凡ての藝術は享樂の具である。

他の一つは生活に泣く心である。茲に藝術は生れ此の心によつて人生の歌は詠はれ藝術は生れるのである。

私共は第一の心を捨て、第二の心をもつてトルストイとラスキンを見なければならぬ。

然らば彼等の藝術と云ひ美術と云ふは如何なるものであらうか藝術の爲の藝術美術の爲の美術、美の爲の美ラスキンとトルストイは此を否定した。此點は全く同一である。

トルストイは其の藝術論に於て「批評家としてのラスキンは最も偉大なる徳の有主である」と讚美してゐる事を私は讀んだ。其れ以來私の心にはどうかしてトルストイとラスキンを結び付けて考へて見度いと思つたのである。美が如何に人生を美化するか。藝術が如何に人心に麗はしき心を與へるか。

藝術は人生の爲に存在し人間の徳の爲に存在し人生と云ふ事を離れて藝術もなければ科學もない事を説いたのが此の二人である。

美の爲にのみ美を求める唯美至上主義そは彼等にとつて何の價値なきものである事を説いて居る。 Art for Art's sake is not the High and Great Art

ラスキンの經濟觀の主潮たる

「富とは只生あるのみ生と云ふ其の中自ら此に伴ふ愛の力歡喜の力讚仰の力凡てを含むなり」
石田憲次氏譯、此の後至者にも二〇六頁

の一文を私共が心に賞玩する時彼の美術觀も同義である事を知る。
トルストイは次の如く云つてゐる。

「藝術と云ふものゝ爲には幾多の勞働者人命就中人間同志の愛が犠牲にされてゐる」と

私共は此の言葉の中から藝術が其れ自身の爲に存するものではなく藝術が其れ自身にのみ目的を持つてゐない事を知るのである。

次に如何なるものを眞の藝術と云ふか。

藝術の各種の批評家が互に他を排し合ひ乍ら又他を否定し合つてゐる中にラスキンもトルストイもそこには何等の藝術が存在しない事を知つた。彼等は

調和を説く其の調和の中に眞の藝術を説いた。

拙稿「ラスキンの經濟的美術觀」二二頁、眞正の美術參照

私は茲に彼等の曖昧なる藝術の定義を與へてはならない。殊に此の二人のなせる如く眞正の藝術の定義なるものは私の如き足らざる美學の知識を以てしては此を説明することは出来ない。

美とは何ぞや。美と快感との關係は何ぞや。ラスキンやトルストイの説いた典型美とは何ぞや。又此に伴ふ美の標準は如何なるものであるかと云ふことに就いては今茲に述べる必要がない。述べざる可からずと云つても此を述ぶ事は殊にラスキンやトルストイの批評に至つては、一層困難である。

唯藝術を以て客觀的神祕的なものと見る即ち藝術を以て最高完全な神の表現の一つであると云ふ見方と、他の一つは主觀的見地から出發する即ち藝術とは吾々に利益の目的を伴はぬ快感を起させるものであると云ふ見方に對するトルストイやラスキンの解釋を見ればよいのである。そして彼等の調和論が第一の客觀的定義と主觀的定義とに存在すべきことを見れば彼等の眞の藝術が理解されるのだ。藝術の目的は只快感にのみ存すと云ふことはラスキンに於ても眞正の藝

術ではなかつた。即ちトルストイの「美の上にもみ立てた藝術の定義は眞の定義でない」と云ふことに一致するのである。

「藝術は言語と共に人間生活に必要なものである。人に若し藝術がなければ言語なき如く野獸のそれと變る事がない」

と云つたトルストイの言語の中には藝術を單に快樂の手段であると考へるのをやめて人生の一條件であると考へなければならぬ義を含んで居る。人生相互を相隔和せしむる手段には二つある。一は言語であり他は藝術である。

トルストイに於ては藝術は感情を傳達するものであり言語は思想を傳達するものであつた。併し茲によく考へて見なければならぬ問題はラスキンが藝術は思想を傳達するものである事を云つて居るのである。此の兩者の相違點も感情の傳達と云ふ事に重きを置けるや否やの問題であつて言語とても思想のみならず當然感情を傳達するものでなければならぬ。此れ洵にトルストイの獨立的藝術觀であり彼の唯我的感情論より生じた見方であると論ずるが宜からう。

大體に於てラスキンとトルストイの藝術觀は同一である。その昔ソクラテスも

プラトーンもアリストテレスも又彼のヘブライの予言者たちも昔のキリスト教徒も佛教徒も回々教徒も均しく斯云ふ様な見方をして居たのである。併し近代の藝術觀には倫理的とか徳とかと云ふ分子が少くなつて來た。唯美的な藝術論が旺であり又人の心を此の唯美主義によつて随分支配する様になつた。單に美のみを基礎とした藝術觀は結局快感享樂主義の藝術觀と墮落したのである。次の記載はトルストイのキリスト教上の藝術の墮落を指示するものであるが又ラスキンの藝術觀と其の倫理的と又道徳的なる點に於て同一なる事を知るに足る。

「凡ゆる國民の間に於て藝術は常に宗教的感情傳達の具として認められた。云ふ迄もなく宗教はその者に於て善惡の標準である。宗教は常に人間の情操の評價の根底となつた。随つて藝術の材料たる感情藝術の傳ふる價値を決定するものは獨り宗教である。

凡ゆる國民の間で宗教上良いと考へられた感情を傳へた藝術は善の藝術であり然らざるものは惡の藝術として排斥されたものである。

キリスト教の未だ惡變しない間はキリストの愛やキリストの生活に對す

る感激や其他キリスト教的感情を傳ふる藝術が良い藝術として認められ
凡て此に反する個人的享樂の感情を傳へる藝術は悪い藝術として排斥さ
れたのである。然るにキリスト教は墮落した。キリストを利用する特權
階級の人々は(法王・僧正・國王・領主・貴族等)全く其の信仰を失ひ乍ら人生の
意味を個人的享樂の中に置く物質觀に變化したのである。

斯して藝術は享樂的のものとなつた。」

ラスキンの近世畫家論第四章「虛偽の理想を論ず(宗教上の)」なる一章中にトル
ストイと全く同じ考を述べて居る。

「時には墮落して宗教藝術を愛すると云ふ事は病的興奮に渴する人が信仰
を裝ふ一種の假面となる。

例へば前晩の舞踏に勞れて朝遅く寢床を出た若い貴婦人が單純にして健
全な祈を捧ぐる事が出来なくとも猶 *Madonna di San Sisto* の黒い眼白い象牙
の十字架を凝つと眺めて想に耽る事が出来る。従つて朝の宗教的興奮は
夕の狂態を償つて餘ありと心から信じて平生の生活を繰り返すのである。

然るに利益を與ふる點には甚だしい此の種の藝術は種々の方面に内心の
信仰を搖がして弊害を與ふる點に於て少しも疑をさしはさむ餘地がない。
斯の如き藝術は愚な傳説に微妙な情緒を纏綿させ美しい空想を健實な教
義と混同し……………」

ラスキンは歴史に記された事件を誠實に自然に表はさうと嚴肅に努力した宗
教的理想が殆んど一つもないことを云つて居る。

そしてキリストの讚美が調子はづれの音楽に歌はれたり其の奇蹟が拙劣な繪
畫を以て描かれるのは宛も其の教義が誤れる文法で説教せられたと等しく決し
てキリストの名譽を増すものでない事を云つてゐる。

ラスキンは更に生れついた趣味の爲に藝術上の美と宗教上の務とを混同する
人々に對しては娛樂を義務と考へ詩を信仰と混同せない様に警告せねばならな
い事を云つてゐる。

近世歐洲の理想的藝術は彼には誠に影の影であり靜かなる觀察の必要に代は
るに機械的な組織を以てし精神的生命に代へるに肉體美を以てし二重に偽と理

想の追及に全力を費して終つたのである。斯して彼等は不自然な美を求むるに立至つた。

彼は歎いた。羅馬の滅亡時代には藝術が劣情を巧に満足させる手段となつたのだと。

* * * * *

私共は茲に於て美術の貴族化又は資本化と云ふ事を考へなければならぬ。今日日本に於てプロレタリア文學の唱導せらるゝの時又山本鼎氏等の農民美術なるものが私共の心に可なり的大眼睛を與へて居る時資本家のみ美術即ち貴族的藝術の可否に就いても深く考へなければならぬ事であらうと思ふ。トルストイの斷定は美のみを根底とし享樂本位の藝術を讚美するに至つたのは王侯貴族其他の特權階級の人々が此を爲したものであると云つて居る。

一八五九年三月ブラッドフォードに於てラスキンは『近世の工藝及び意匠』と題して一夕の講演を試みた。彼は十九世紀に於けるブラッドフォードに於てピサの麗しい共和國を打たてんとしたのではないけれども當時の英國の工業界の無

味單調なるを慨して次の如く叫んで居る。

「近頃の美術工藝上の勞働者は非常に鋭敏で賢い。彼等は感ずる事も強く悟も亦早いのである。併し彼等は誠の意匠に缺けて居る。意匠は決して空想からのみ生み出さるものではない。深き體驗により詳しく觀察により初めてなされるものである。更に生活に平和と満足がなければ駄目である。

若しも彼等を楽しい環境に美しい周圍に置くに非んば凡ての美術に關する講義も獎勵も教授も指導も全くの無益となるのである。

彼等の心に誠の教訓を與へ彼等の生活を誠に高尚にならしむるならば自ら彼等の意匠を向上せしむる事が出来るのである。

吾々は十三世紀のピサの生活を持つて來て其の美を今日に復興せしめ様とは思はぬ。吾々が彼等の手によつて近代英國國民の生活を美しく装らんと欲するならば彼等に近代英國人の幸福な生活を與へなければならぬのである。

中世の生活は誠に花やかで美しかつたけれども彼等の營みし奢侈の生活は暴虐と掠奪とによつてのみ營まれ上流社會の占有となれる美術そのものゝ滅亡と榮華に誇つたピサの國の滅亡とは併せて到來したのである。』

藝術は人類の苦悶を訴ふる叫のみとは云はない。併し乍ら人類の苦悶を訴ふる叫びである事は眞の藝術の價値である。

美を感じる事は吾々の肉體の外的性質とか又は感覺以外の他のものを決して認めるものではないと云ふ説に對してはラスキンもトルストイも全然反對の立場であつた事は既に述べし所である。ピサの美術は徳と云ふものゝ價値を認めなかつた。ピサの藝術はいたづらに感覺的であり餘りに智的であつた。若しも彼等に永遠性が必要とするならば彼等の藝術が Moral に立脚せねばならなかつたのである。歴史は吾々にも亦トルストイにもラスキンにも色々の教訓を與へて居る。

ピサの藝術は只上流社會の專横なる力によつてのみ維持せられ最大多數の幸福一般人民の慰藉と云ふ徳を持つてゐなかつたのである。故に歴史は繰り返し

て大美術家の輩出は即ち其の國の衰運と滅亡とを意味したのである。ペラスケスの名と共にスペインは亡びチチアンの名と共にベニスに死んだではないか。レオナルドの名と共にミランは滅びラフェールの名と共に羅馬は滅んだではないか。

トルストイは云つて居る。

「今日の藝術が墮落したのは全く藝術が貴族藝術となつたからである。

信仰を失つた上流社會の要求が享樂本位の藝術を生むに至つた。其の享樂本位の貴族藝術が民衆藝術と離れて一つの種類を形づくつた。藝術に對する誤謬は全く茲に生れたのである。貴族の藝術を以て藝術の全體と信じ此を眞の唯一の普遍的な藝術であると斷定したからである。」

ラスキンが勢力のあるものは其の勢力が加つて來ると共に此に様々の卑穢な所行を紛飾するものであり古來の美術も偉大な力を表示すると共に驕慢な肉慾を促すものとなつたと云へると一般である。

吾々はラスキンやトルストイによつて美術の力と慰藉とが貧しい者に到達せ

ねばならぬと云ふ最も高尚にして貴重なる特權を持たなければならぬ事を教へられた。

過去の美術は其の一部分の社會に限られ一部分の人の春を飾る具となつたが爲に亡んだ。吾々の美術は其の普遍的にして社會の下々に迄及ぶ事によつて永く勢力を保たねなければならぬ。

Rus. P. 153—The Two Paths

トルストイは貴族藝術と民衆藝術とを比較して享樂本位の藝術即ち貴族藝術が持つてゐる所の缺點を次の三種に歸して居る。

- 一、本來の無限にして多種多様な深刻なる宗教的主題を失へること。
- 二、形式美を失ひ虚飾的な不可解なものとなつたこと。
- 三、自然と眞面目とを失ひ全然技巧的なものとなつたこと。

Studies in Ruskin, Some Aspects of the Work and Teaching of J. Ruskin; By E. T. Cook, 1890.

此本の第一章ラスキンの福音美術の本質論中第十三頁にクック氏はラスキンの美を分類して Typical (形式又ハ典型) 及び Vital Beauty の二者に分つて居る。形式美とは即ち我々人間の體的外的な性質であり (External qualities) そは神の特性を

表現 (Divine attributes) を示すものである。生命美とは凡ての生物が felicitous fulfillment の状態に於て其の機能を幸福に働かせて居る事である。

今私は茲に詳しく典型美と生命美に就いて述ぶる事をしないけれどもトルストイの(二)に於ける「形式美を失ひ虚飾の不可解なものになつた」と云ふ意味はラスキンの所謂無限性を表示する所の、即ち神性を表はす最も典型的なるものとしての形式美及び凡ての有機體が與へる所の健康にして生命あるエネルギーを表現する生命美とを没却せる事を意味するものである。

凡そ享樂の感情から來るもの程墮落せるものはない。宗教的意識から來るもの程美しきものはない。私共の凡てが宗教信者たる事を必要としないまでも尙享樂の感情に優りて宗教的の價値は數等上である事をよく知つて居る。トルストイは上流社會の人々の感情に局限されたと云ふ事實の爲にその主題の貧弱の度を増した事を悲しんだものである。

富める者や特權階級の人々の經驗する感情の範圍はラスキンとても労働者や貧困者が生れ乍らに持つてゐる所の自然の感情よりも遙に狭く價値なきもので

ある事を認めてゐるのである。

美術はよき美術であり得ると同時に大多数の民衆に不可解なものであり得るといふ論定は極めて不正なものである。斯の如きは自ら美術の破滅を來す。

トルストイ

要するにラスキンとトルストイの藝術観は誠によく似たものである故に二三の相異點を掲げて此の拙文を終りたい。

既に前述の如くトルストイの説によれば眞の藝術と然らざるものとを區別する標準は凡ての藝術が其の普遍性によつて如何に一般民衆に理解されるかと云ふ點にあつた。眞の藝術は即ち藝術と一般民衆とを合一せしめる點にある。此の普遍性の力は此の普遍性の程度は又其の藝術の優秀なものであるかを見る所の尺度ともなるべきものである。

然るにラスキンは藝術の普遍性のみを以て其の眞偽を決定するものとは必ずしも云はなかつた。寧ろ藝術其のものを觀賞するものゝ心の裡に偉大なる藝術家と同じ心の觀賞性がなければ凡ての藝術を正しく理解し得ないのは當然だと

考へたのである。

トルストイの説によれば凡ての藝術は人間生活の一條件であつた。従つて將來の要素は其の中からどうしても排除せざるを得なかつた。藝術は時と場處に於て人間相互の心持の傳達にどうしてもなくてはならぬものであつた。

古代に於て宗教藝術が最も尊重せられ宗教藝術以前のもは此が藝術として價値が一般に認められなかつたことは其の當時の宗教道德が藝術の善惡を判別する上に於て大なる權威を持つてゐたからである。近世に於ける宗教の墮落は藝術に於ける宗教の權威を失墜せしめ藝術を判別するスタンダードは唯美若しくは快樂となつて終つたのである。

彼によれば今日の藝術を民衆の近附ける爲にはどうしても宗教的要素がなければならなかつた。斯して藝術が人生の宗教的觀念より發する所の感情を傳達せねばならなくなつたのである。

ラスキンが藝術の根本たる處の感覺に立脚地を置き乍ら而も感覺の中に一定の法則あることを主張し乍ら眞善美の調和を謀りしことは快樂と美を藝術から

全然排斥し去つたトリストイに比して確に一步進めるものと云つて良しいと思ふ。

或る人は云つた。「感覺の快樂を排斥するトリストイは神の作れる一切の物を善とする余祐に缺けてをるものである」。神が作る一切の物の中に或る法則を見出し其の中に道德的法則を打ち立てたラスキンの藝術觀はトリストイの美と善の調和すべからざるものを説いたものに比して全然反對する所のものであり而もラスキンの價値は此の中に躍如たるものがあるのである。

ラスキンの落穂を拾ひて

ラスキンの山の教
ラスキンと高原
物質的幸福者への警告
ラスキンと讀書に就いて
ラスキンと科學
ラスキンと都會建築
ラスキンの微利論
ラスキンの貨幣論
ラスキンとターナー及び
ラファエル前派

ラスキンの山の教

私共は彼より山嶽の科學論を學ぶ
必要がない、美と徳と經濟を學べば
よいのである。殊に私は彼より山の
人間味と詩情を學んだ——拙稿はた
ゞ感激せしまゝに綴りしものである

平和の海には廣さと自由さがある。森林には複雑の静けさと集りの美がある。山には立像の様な曲線の美がある。私共はその立像の美から深い静けさと美しい音楽と澄みきつた色彩の變化とを學ばねばならない。

Lord Avebury 郷は其の山嶽論の中に山には悦樂と平和と健康の滾々として盡きない泉があると云つたがラスキンは美と徳と宗教と經濟を見出したのである。彼には山嶽は人類に建てられた學校と伽藍であつた。學徒の爲には麗はしき書庫であり彼の愛した労働者の群には粗朴な教訓の温情を指示し思索者の爲には静かな庵となり信仰深き者には神聖な榮光となつたのである。

山嶽の秋は時として憂鬱である。山嶽の春は歡喜である。山嶽に於ける人生の行路と一般であることはラスキンによりて啓示された教訓である。

ラスキンは嘗てかう云ふ事を云つた。「吾々人間は時として自然の風景の神聖なる感情を無視して甚だしきはその昔佛蘭西の革命家が其の國の大寺院を馬小屋にした事がある」と。

ラスキンによれば吾々は此の地球と云ふ大きな寺院を決して運動場にしては

ならないのである。倫敦の地下鐵道をくゞる時彼が皮肉の言である次の數行を私は憶ふ

我々の快樂は地壇の廊下に鐵道を通じて其の祭壇を食卓とすることだ。
ウイリアムテルの古跡たるルツエルンの斷崖にトンネルを通じて美しい湖の景色を損じた。

英國の如何なる山間にも汽笛の聲が聞えないことはない。英國の詩人が崇敬の愛を捧げて居たアルプス山でさへも私共は此を「熊の棒登り」の曲藝に使用する棒位に考へて自ら此に登つたり下つたりしては愉快を叫んでゐるではないか。此の樂しみが絶頂に達すると私共は時としては爆烈彈を投げては山の靜寂を破る。

ラスキンはかつて英國民が段々に文學を蔑視する様を歎いて自ら稱して富強な國民と誇り乍ら争つては貸本屋の書物を手垢で汚す様な有様であるのは何といふ愚なことであらうか。

と叫んで居る彼は又英國民が科學を蔑視することを歎いて

英國民は科學から利益をあげることなら喜んでやつて居る。我々は其にいくらか肉がついてゐるならば科學の骨にも夢中になつてかぶりつくのだ。而も誠の學者が我々に對して残つた骨でもパンの屑でも此を乞ふ場合には「其は又別の話だ」と云つてはねつけて終ふ。

と叫んで居る。彼は又英國民が美術を蔑視すると歎いて英國民は石炭の様に繪畫を販賣し様として居る。又鐵の様に陶器を賣飛ばさうとしてゐる。そして出来ることなら他國民が將に其の口に入れ様とするパン迄も奪はうとするのだ。

簿記を學ぶ様にして習つた美術は此を習得したところでやはり我國民をして只澤山の帳簿をつけさす位のものである。

と叫んで居る。
此の三つのラスキンの叫は其著作中に最も多く發見せらるゝ所の思想であるが私は少しく人間が自然を蔑視して山嶽すらも商品扱ひする今日の愛山嶽家に對して彼よりの教訓を述べて見度いと思ふ。

宗教的に道徳的に又美術的に山嶽に對して抱いた我々の詩情は日本でも随分古いことであらうと思ふ。萬葉集の中にも富士の美を歌つた歌詞のあることは私共國民性の誇として足るものである。

大江山は恐ろしい鬼の棲家である。獨逸でもシュワルトゲヰイルゲヤシュワルトワルトなどの山々は恐ろしい神祕の翼をひろげてグリムのメルヘンにも出て来る。山嶽は人間が地上に生れた前からきつとその美しい姿を地球の上に現はしてゐたのであらう。

人間は山にびつくりし山に憧憬れて永い間の歴史を營んで來た者であるが科學といふものが發達してから大分びつくりはしなくなつた。私共は山嶽に就いて趣味さへも抱いたのである。此の趣味の義は何人にもあらうけれど特にラスキンによつて代表されたと云つてもよい。岩村透氏の名文を借るまでもなく審美上一般人士に山嶽の興味を起さしめ思想上山嶽を尊重する氣風を起さしめたに就いてはラスキンが最も力あつたことである。

ラスキンが山嶽の研究に興味を持ちしは随分小さい頃であつたらうと思ふ。彼の山に對する趣味は極めて小さい時にあらはれた。コリンウッド氏のラスキン傳にも記された如く其の小さい少年の頃ノースコートに自分の肖像の背景を尋ねられた時直ぐ「山にして下さい」と答へたのであつた。

プレーテリタによると十四才の時はラスキンの大陸旅行の最初の年であつて彼は初めてアルプスに接した。

一八三三年の春プラウトはフランダーや獨逸の寫生畫を出版した。其の時ラスキンは父に連れられて此の書の出版元に行きコブレンツの風景を寫し又モゼル河の上に突き出た或る家の窓を描いた見本を示されたことを彼はよく記憶してゐたのである。此のプラウトの畫帳は毎年彼が一族の夏期旅行に出發する前倫敦のハインヒルのラスキンの家に届けられたものであつたがラスキンの母が或る時繪ばかりでなくほんとうに行つて實見し様ではないかと主張した餘りいよく父も此に賛同して此の方面の旅行に旅立つことゝなつたのである。其の夜であつた。ラスキンは彼自ら大切に藏つてあつた地理の本を持ち來つてモ

ンブランや其の他のアルプスに關する珍らしい事柄に讀み耽つた。彼等はカレ
ーからブラツセルを経てコロンに行き靜かなラインを遡つてストラスブルグへ
出た。彼のシュワルツワルドを通過してシャフアウゼンに行きバーゼルやイン
ターラーケンやルサーン等の北部瑞西を廻つてコンスタンに出て再びライン河
の上流についてコワールへ行つた。それからスブルーゲンを越えてイタリーの
ミランやゼノアへ赴いたのである。

ラスキンは其の頃の事を追想して次の如く云つて居る。

私の生涯の安全な時に、無邪氣な子供の様な慾を抱いて居た時に、又私の憂
苦と云つてもそれ程大したものではなかつた頃、私は彼のシャッフアウゼ
ンの段臺を下りた時私が生涯の運命凡ての神聖にして有効なる運命が定
つたのである。私の感情と信仰の中未だに生存し私の思想の中に平和と
救済のこもる所のものはない。凡て此のアルプスを眺めし段臺とジュネーブ湖
畔に基かないものはないのである。

一八四四年ラスキンは近世畫家論第二卷の材料蒐集にシャモーニへ行つた此

のアルプスの小さい村は最も彼の好みし所であり彼の生涯幾度となく訪れた僻
村である。ラスキンの自叙傳を讀む人は私の記載を俟つ迄もなく一八四五年と
四六年にも彼が此の地に訪れたことを知るであらう。

一八四九年アルプスの僻村の經濟生活は彼の社會改良家としての心にまさま
ざと映じたのである。

一八四九年私は三十才であつた。近世畫家第四卷の材料蒐集の爲にモン
ブラン附近アレーブランシ。コルドフェラよりザーマツトへ旅行したが
私は此の時アルプス連山の哀れむべき農業状態を知る機會を得たのであ
る。此の思想は後に私のセントジョージ組合の設立の源となつたもので
ある。

斯の如くラスキンは山を見て美を學んだのみならず道德と經濟をも其の山嶽
美の中に發見したのである。

*

*

*

*

少年時代のラスキンは山によつて教へらるゝ所のものが非常に多かつた。山の神祕は唯一の彼の教育者である。高く崇高なアルプスの連山、低けれども靜に平和なハイランドの山々は彼にとりては盡きせぬ思ひ出の教養者であつた。山の自然が如何に少年の心を喜ばしめたかに就いては彼は敢て此を述べては居らぬ。併し自分自らの心の中に起つた感想は次の數行にも表現されて居る。

(近世畫家論第三卷第十七章十三節)

私の生涯の一つの事件として記憶することはダーウエントウオーターの湖畔フェアースタラーグの岬へ私の乳母に連れられて行つたことである。

岩の上から黒い湖を見た時の恐ろしさと喜の感じは今日も忘れられない。又シエーブフェルスの山を駆け上る馬車の中から出して貰つて横切つた時又冬の朝のことであつたが氷柱の降りてゐた時キンクロス近くのあのグレンファアグを過ぎた時の思ひ出である。

此等の旅行の山の脇道や山中の景色の中へ少年の私を連れて行つた記憶

は絶えず忘るゝ事なく十八九才迄持續して到底其後に經驗し得なかつた程の愉快を覚えて居る。

丁度私には心の氣高い親切な戀人の傍にあつて男の感ずる喜の強さであつた。そして私の説明の出來ない點に於ても全く戀心の感じであつた。

倫敦に生れた彼には其の單調無味の生活の對象として山の自然の美はほんとは懐しいものであつた。彼は倫敦に生れて二、三年の間と云ふものは街上の煉瓦壁より外に景色といふ景色を見たことがなかつたのである。

兄弟もなく姉妹もなく友もなき只一人の彼は田舎の子供が感ずることが出來ない恐異の心を以て此を眺めたのである。

山嶽や廢墟に對する感想はごく小さい時から彼の兩親よりその歴史的事實を物語られていたがそれは彼の心情に恐れと悲しみの感を変へないでは考へられなかつたのだ。そしてラスキンは「畏怖と悲哀の感ばかりでなく死の感じさへも混つてゐた」といつてゐる。

少年の彼の心には特別な宗教的感情は此れに混つてゐなかつた。幾らか幽靈

とか精靈とかいふことを信じてゐたのであつたが彼は山や自然を神様の造つたものとは別に考へてゐなかつた。彼は天使に關する思想感情は全く此を思ひ出すことが出來ず自然は神と離れた別の事實又は存在と考へてゐたのである。斯の如く彼は宗教的感情は比較的少く山や自然に抱いてゐたのであつたが山嶽そのものがどこまでも神祕的であり神聖であるといふ感じを絶えず持つてゐたのである。

此の感じは彼にとりて喜悅の混つた本能的畏敬の觀念であつた。

* * *

山の感じは一方肉體的でもなく又智的でもない。山の感じが誠人の心に透徹せん爲には私共の心が純潔な公正な又大揚な状態を必要とすることはラスキンの山に對する教の基調である。

斯の如き心を以て私共が感じ得た美的事實を人間の知識が判斷するに當つては先づ第一に山に對する純感情の鋭さ如何によつて決定さるゝのである。山に

對して縦令ひ生れつき鋭い感受性を持つてゐる人があつても純潔な心を以て此を受け入れなければ何の役にも立たない。

ラスキンは山を以て單に慾望の奴隸としてはならないことを説いてゐる。卑しい肉慾の調劑藥としたりそれより受ける情緒全體が漸次に俗化して山の感じが私共の肉の下僕となつてはならないことを説いてゐる。

山に對する趣味は我々の道德性を美しい圓滿の状態に牽きつける事物に對しての最大の愉快を感じる力でなければならぬ。

山に對する科學的判斷は私共はラスキンより學ぶ必要がない。

彼より學ぶべきものは山嶽の詩情と徳性である。

ラスキンの詩とは

"The suggestion, by the imagination, of noble grounds for the noble emotions"

であつた。そして彼の高尚な情緒とは愛と敬と稱歎と感喜とであつた。此に反するものは憎惡と侮慢と恐怖と悲痛とであつた。

ラスキンは山を見るに此等の神聖な詩情を以てしたのである。そこに彼の山

嶽論が生れ倫理的山の教が説かれたのである。

* * * *

山嶽にも悲哀ありとは不思議の題目である。彼は現代人の無信仰と悲哀を山に學んだ。

山の淋しさの中に現代人の倫理的缺陷を認め此の缺陷より生ずる悲哀は到底古代の希臘人や羅馬人や中世紀人の味つたことのない墮落した悲哀であることを云つてゐる。

彼の生涯を見るならば誠に感傷的であるべき筈である。然るに彼の失戀といふ背景を以てしても尙現代人の悲哀が余りに信仰の淺薄なものであることを感じたのである。

無信仰といひ悲哀といひ只現代の誤つたユートピヤニズムやローマンテイシズムから湧き出でた其のものではない。

彼は山に登りて體驗した。力強い體驗の結果は彼をして勇敢に現代人の悲哀

を山を通じて冷笑せしめたのである。

ラスキンの眼に映じた現代は古代や中世紀よりもつと悲哀的な時代であつた。そして彼の悲哀的と云ふ意義は最も嚴肅に思索の道を辿つた場合に生ずる高尚な意味での悲哀ではなく只茫然と疲労した場合の意味であつた。現代人の悲哀は誠に倦怠と智力と過勞と心身の不快から起るものである。

ラスキンの古い物を尙ぶ心から感じた中世の頃には戦争もあり苦痛もあつたけれども同時に其の頃には痛切な快樂があつた。中世紀に與へられた暗黒時代と云ふ名稱は其の藝術的方面に於て全然適用出来なかつた如く吾々の時代こそ反つて暗黒時代である。

中世時代の黄金色は血を點じてゐた。現代の茶褐色には塵埃が散布されてゐるのである。現代の悲哀の原因はラスキンによれば現代人の信仰の缺乏であつた。

政治上宗教は一個の空名に過ぎない。又藝術上に於ては一種の偽善や虚飾であるかも知れない。然し乍ら吾々の無信仰は輕佻浮薄となり悲哀となつたので

ある。

吾々は退屈を感じる。そして花園に對して興味を持たず反つて荒れた淋しい場處を求める。然し間もなく吾々は元氣を回復してそして廣漠たる場所に尊敬を持たないから山中に歸つて集會堂を建てる。シナイ山上に獲物が居るかどうか知らないが今にきつと其の上で鐵砲の音がするだらうと私は考へて待つてゐる。

ラスキンの言葉は實に皮肉である。

近代人の悲哀は中世紀人の様に恐怖と冥想の精神を備へてゐない。餘りに自由大膽で彼等は回想と云ふことをしない。近代人は山嶽を觀賞するにも畏敬の念を感じない。吾々は自然の他の事物に對して全く尊敬の心を失つた。自然の中に神があると云ふことを失つて行くのである。

吾々の山に對する愛情は自由を愛する傾向と關聯して奇妙に山を愛する傾向がある。

近代の社會は一般に斷食する爲よりも饗宴する爲に山に登り其の水河を覆ふ

にチキンの骨や玉子の殻を以てするのである。

ラスキンと高原

(一)

私の云ふ高原とはスコットランドの意味である。ラスキンはその著書の中に到る處ハイランドの純朴な風俗を讚美した。私は渡英して永く高原の片田舎をコーチを雇つて徘徊ひ歩いたのもラスキンを思ふ旅であつたからである。ラスキンは三つになりし時初めてスコットランドの Perth の町に連れられて行つた。其の後一八二四年五歳の時再び Perth の町を訪れ三度び一八二七年の夏を此の地に過した。彼は斯の如く幼少の時から高原の閑雅なる風習に慣れたのである。彼の生涯の一事件として彼の記憶に残る所のは或る冬の朝岩に氷注の降りてゐた時キンクロススの近くの Clentars を過ぎたことであつた。彼の記憶の届く限りに於てそは誠に楽しきものゝ一つであつた。

「此の愉快は決して私の聯想と獨立し得ないものである。元來私は見聞す

る力が出来ると同時に山は私の愛讀した書籍の中に聯想として養はれたものである。だから *Centaur* や外の谷々は私にとつては奇怪な信仰に充されて眺められ其は何時も神祕的性質を帯びて到る處に「白姫」を認める様な氣がした。

Lochleven、*Kenilworth* の廢趾の如きものに對して一層確實な又正當な聯想を起すに足る程の簡單な歴史的事實を自ら讀みもし又父母から話されもしてゐたのである。斯くてスコットランドの山や廢墟に對する私の快感は一種の怖と悲しみの感情を交へない譯には行かなかつた。」

彼は一八一九年の冬霧深き二月の倫敦に生れたのである。彼が生れて二三年の間は街上の煉瓦壁より外に景色といふ景色を見たことがなかつた。兄弟もなく姉妹もなく友達もなかつた。

此の少年がスコットランドの美しい自然の力に初めて接した時彼は次の如く回想せざるを得なかつた。

「私は別に明白な宗教的感情は持つてゐなかつたのである。然し乍ら此の

山水の美は田舎の子供が感ずることの出来ない一種特別な別天地の感を起したのである。明らかな宗教的感情といふものは混じてゐなかつたけれども自然全體が最も美なるものから最大の事物に到る迄神聖であると云ふ感じをたえず催せしめたのである。

斯の如く高原の靜寂はラスキンにとりては喜びの混つた本能的畏敬の觀念を生ぜしめたのである。

(二)

一八五七年久し振りにラスキンはスコットランドを旅行した。そして彼はスコットランド人の性質の最も重要な點が彼等の國の山や河より直接に受けた所の印象に密接な關係のあることを發見したのである。

彼はその用ひてゐる所の言語の調子から又その國の文學に表はれた徳性から見ても此のスコットランド人程自然の美と力とに感激し主義をも理想をも決定せらるゝ國民は嘗てなかつたと云つた。

彼はスコットの詩を讚美しバーンスの詩が永く國民の間に傳承されてゐる事

を褒め讃えた。彼はスコットランドに美術として見るべきものゝ殆んどない事を歎じた一人である。然しそれと同時に彼等の有した自然の美しき景色とその徳義心との関係を考へてはラスキンは本當に賞讃せざるを得なかつたのである。

“But an instance of its farther connection with moral principle struck me forcibly just at the time when I was most lamenting the absence of art among the people.”

The Two Paths, Conventional Art: Lec. 1. 12.

一八五七年までラスキンは殆んど好んでアルプス山麓の風景を讚美しその地方に見らるゝ所の建築物などに就いて研究を怠らなかつたのである。彼はスコットランドに遊んで初めてアルプス山麓に保護せられてあつた所の古き建築物の價値を認めたのである。

瑞西人の住居に施された彫刻や色彩の價値は勿論彼にとつては余り優れたものではなかつたけれども彼等が *Completeness and Delicacy* であることを知つたのは全くスコットランドの旅行の賜物であつた。スコットランドの北の山々には彼の注意を惹くべき古代建築の破片も殆んど残つてゐなかつた。私もラスキンを眞

似て北方の都市インベネス市に三日滞在したが彼は次の如く批評してゐる。

此の高地の首府であるインベネスは美しい自然の風景を持つてゐる所である。清い山と河との景色を眼下に見下し遠く海に連る全體の眺めは世界に於ても珍らしいものゝ一つであらう。

Granpians の山々の翠 *Morey Firth* の美しき流れ斯くも麗しき都市であり乍ら此を遠望する時其の自然の風雅を助くべき人工的美觀は全く認められないのである。

私は誠に淋しい感じがした。私の生涯に於て初めて斯の如き人工的價値を備へぬ所に出遇つたからである。

彼は美術の人心に及ぼす影響に就いて考へざるを得なかつた。そして何事も意匠を凝らすことを愛する印度人と何事にも淡泊を愛するスコットランド人とを心に比較して見た。

彼は印度人を以て天性美術を愛する國民と云つた。彼はスコットランド人を目して無頓着である國民と云つた。然し乍ら質朴な *Rude chequers of the tartan* の服と

巧に仕立て上げられた Cashmere 織の袍と孰れが果して高貴なる心を包んでゐるであらうかといふ事を考へた時

一方に於ては美術を愛する國民の間に非常に醜惡なる行爲を認め他方に於ては美術を無視する國民の間に極めて高貴なる心を認める事の出来るのは不思議な次第である。

勿論美術を愛することゝ不道德な行爲が相伴つてゐることを只一度見たからと云つて美術を愛することが不道德な行爲の根源であると論難することは出来ない。又美術を無視することゝ高貴なる人間性が一致した場合に直ちに美術を無視することが人間の心を高尚ならしむる原因だと断定することは出来ないのである。然し乍ら私は茲に美術上に於ける大なる成功が國民性の墮落を伴ふものであることを認めなければならぬ。嘗てリヂヤ人はメデア人に亡ぼされたではないか。希臘人は羅馬人に征服せられたではないか。獨り外國の壓迫によつて亡びるのみならず或る國民の美術がその最高上に達した時には其の國の衰亡を意味するもので

ある。

印度の美術が優秀で巧であることは確かだ。然し乍らその國の美術は自然の事物を表現するといふ尙いことを忘れ勝である。

斯の如き美術を生み出す國民は健全なる智慧と自然を愛するの情が湧き出づる源に全く離れ去つてゐるからである。然し乍ら私はスコットランドの國民を感じて彼等の有すべき自然の美景とその道義心との關係を考へては覺えず賞讃せざるを得ないのである。

ラスキンは自然の美なくして人工の美のみを有する國民と人工の美なくして自然の美のみを有する國民との間に大なる道義上の相異あることを認めたのである。そして彼は次の如く結論した。

Art, followed as such, and for its own sake, irrespective of the interpretation of nature by it, is destructive of whatever is best and noblest in humanity. —

誠に自然はたとひ淺く見淺く知られた場合に於ても尙且つ人間の高尚な徳義心を養ふべき力を持つてゐる。自然の尙い意義を表はすことを努めず只美の爲

にのみ發達した美術の存在は人間の純なる心を破壊すべきことを吾々はラスキンに學ぶのである。美術の生命と發展とは常に人間の生命と發展とに伴はなければならぬ。

彼はスコットランドに旅をして素朴なる美術と高潔なる人心との關係を學んだのである。

(三)

Ruskin, though by birth a Londoner and a child by adoption of the English Lake district, may yet be claimed as in some sort half a Scotsman.

イー・テイ・クック氏の記載は簡略ではあるけれども誠によくラスキンのスコットランドに對する愛好性を語るものである。

其の頃英國の文藝史上に於ては二つの大きい潮流があつた。一つは佛蘭西小説家の微妙な解剖に親んでゐる人の思想であり他の一つは獨逸哲學の影響を受けた人々の思想であつた。眞に偉大な人物の第一の資格は無我と謙遜な點であると考へたラスキンにとりてはバルサツクもゲーテもバイロンもウオーヅウオ

ースもスコットの謙遜と無我とは遙に及ばなかつたのである。

スコットランドの首府エディンバラの都はラスキン眼を通じて此を見れば良建築によつて其の美を増し又悪建築によつて其の美を損ぜられた都會であつた。彼は此の市街の近世建築上素朴勇健なる點に於て最も讚美した所であつたが此の町の銀座通とも云ふべきプリンセスストリートには高い質素な所謂 *Scott-Monument* が靜かに立つてゐる。

ラスキンの好んだ好古の情と靜かな美しい色彩とはスコットの幼兒から自然と備つてゐた如く此の靜かな都に誠に相應しく市街や記念碑に刻まれたのである。

ラスキンは嘗てスコットランド人は眞に自由を愛する國民であると云つた。詩人スコットに於ても好古の情、自然を愛する心は自由を愛する心と合一したのである。

スコットは Puritan よりも Cavalier を愛した。王に對して忠義であるよりも自由で自主であつて前者は形式に縛られて奴隸的であつた Puritan よりも愛すべきものであつたからである。

自然児のスコットはラスキンの最も愛した所である。スコットを生みしスコットランドの土地柄を愛した如く彼はスコットの心柄を愛したのである。スコットは何等藝術上の必要な知識を持つてゐなかつた。彼は繪畫にも彫刻にも殆んど興味を持たなかつた。然し乍らスコットは自然児であるが故に暗く美しく古くて自然に近いゴテイツク建築を漠然と愛することが出来たのである。スコット程悲しみに充ちた者はない。他の大詩人は悲しまんと欲して悲しんでゐるのである。彼等は用意をして悲しんでゐるのである。其の心の裡には希望に充ち平靜な嚴然とした所があつて誠の悲しみを知らないのである。

バイロンは悲哀的といふよりも寧ろすねてやけ氣味であつたのである。キイツは病身で陰氣であつた。シェレーは信仰がなかつた。然し乍らスコットは生れつき終始一貫した悲哀を持つてゐたのである。彼の情愛に満ちた笑と眼ざしとは一として涙の露の爲に其の光を増さないものはな

スコットは自然を目して其れ自身特別の生氣と感情を有するものとして始終此を見る傾向があつた。彼は何時も人間に對する如く此を愛し同情し風景の力と彼の頭の中に描いたものゝ中に全く自己を忘れ自己の人格を没却して自然の偉大さに跪ぎいたのである。

ラスキン

スコットは其の若き頃暖い日光の下に麥の實のつた故里の丘の上に身を横へて冥想したのである。

自然は斯してスコットに對し三つの方面から愛すべきものとなつた。彼は第一に都と人間との間に共に見ることの出来ないあの完全な美の爲に自然を愛したのである。第二は堀を圍らした花園が中世の人の心を動かしたと同様に彼は自由にして快活なスコットランドの沼澤地を愛したのである。第三には彼の好古性から嘗ては人工の美であつた過去の遺跡記念物を荒寥たる風景の到る處の緑の丘や翠の影に都會に見出すことの出来ない塚や墳墓として發見したからである。

ラスキンの心にもスコットの心にも現實ならぬものに對する愛が極めて深かつた。

スコットランドの土地柄は現存せざるものへの憧憬と理想的夢幻的なるものへの誠によい對象物である。

私共は時として原始時代の生命を愛することがある。現代の新しいものよりも過古の古きものに價値を見出し勝ちである。

ラスキンもスコットも古くさいものを好んだのである。

新教の信者が舊教を古くさいものだとして輕蔑することがあつてはならない如く吾々は自然の中に好古性の美を發見しなくてはならない。斯くてスコットもラスキンも吾々に古きものゝ尙き教を學ばしめたのである。

ラスキンは一八五三年十一月一日のエディンバラ講演に於て次の如く述べてゐる。

ゴテイツク建築に特徴である所の Pinnacle, Turret, Bellrey, Spire, Tower, などと云ふ言語は吾々の耳に一種云ふ可からざる快感を與へる。單にスコットランド

の景色が斯かる古きゴテイツク建築の要素によつて其の美を増すばかりでなく詩歌や小説が此の言葉によつて一層に其の美を増すものである。

スコットは彼の故國の一風景を叙するに當つても斯の如き思想の助けを借らねばならなかつた。

“Each purple peak, each flinty spire, was bathed in floods of living fire.”

美は人間の靈性を絶えず力付ける爲に神の定めた一つの要素である。そして此の美は古きものを尙ぶ時に一層である。

ラスキンもスコットも古風と云ふものに美を發見した人々であつた。私共が彼等を懐しく感ずる所のものも今日に於てよき趣味とは古風なるものへの趣味であることを知つてゐるからである。

物質的幸福者への警告

多くの批評家の言はともかくも物好きな私にはラスキンの著書全部が物質的幸福者即ち富める者への教示であると言つてよい位である。唯單に「富める人」と言つても、ラスキンには富に精神的のもの物質的のものとの兩者がある如く「富める人」にも二種類あるわけだ。物質的幸福ものとは物質財の上に金錢の上に、権力の上に幸福である人を謂ふのである。

物質的幸福者とは大低過大な財産を持つてゐる人のことである。そして此等の財産は只一人の人間の手や頭ではどんなに一生懸命に働いたとて到底これを作り得ないものである。

若しも一人の仕事が多數人に利益を與ふる時此の一人の人に莫大なる富又は財を與ふる事は良い事かも知れない。然れど此の種の財はその公の利益に對する報酬として任意に與へらるゝものであつて決して労働に對する報酬ではないのである。

ラスキンによれば正しい労働に對する正しい報酬によつて人々は其の階級に應じて楽しい生活を營み其の人が若しもそれを欲するならば高尚な生活を享樂する事が出来るのである。併し凡ての人が此によつて大なる富や財を蓄積する譯には行かない。

現今の經濟組織に於て少くとも大資産を有する人は次の三手段によつて蓄積したものであると云つてゐる。

(一)大勢の人々の労働を支配することにより又此に税を課して自らの利得とし

て居ること。

(二) 鑛山農産物を産出する土地其の他此に似た貴重な資本を専有して全く自分一人の支配に屬せしむること。

(三) 商業的の賭博たるスペキュレーションを營むこと。

ラスキンは此の三項を掲げて特に(一)と(二)は或場合に其の形式によつては普通の人と雖も到達し得べき方法であり合法的でもあり又國家にとつては都合の良いことであると云つてゐる。併し乍ら第三の方法たる投機事業を營むに至つては國民に利益を與へないのみならず有害なものであるとしてゐる。彼によれば普通の商業は實際上の必要或は實用の礎の上に立つて又此によつて多少制限されるものであるけれどもスペキュレーションに至つては只利得のみを其の目的とするのであるから空想上の必要や人氣を煽り立てることによつて一時的の利益をつかまふとするのであるから害があると云つてゐる。

多くの投機的な盗みは資本家の投機的虚偽の仕事と虚偽な材料によつて營まれてゐるのである。此等は單に不正直な財貨を積むといふ盗みよりも一層悪い

ことである。

ラスキンは英國の街路を走つてゐる美しい馬車や高原の山野に輝く高壯な別荘が多くは無意義であるところの又無自覺であるところの公認の盜賊の住家であることをいつてゐる。

* * * * *

嘗てラスキンは一八五八年二月のタンブリツヂウエルの講演に於て

制限の必要は勤勞の必要と同じく吾々の名譽とすべきものである。廣義の自由といふものはそれ程尊いものではない。寧ろ劣等の動物に特有な卑しい性質のものである。如何に偉大な如何に勢力のある人でも小鳥や小魚程の自由はない。

といつてゐる。

吾々は公平に考へなければならぬ。

彼より人の尊い處は自由に非ずして寧ろ制限にあることを悟らねばならぬ。蝶は蜂よりも自由であらう。併し蜂がよく彼等の小さい法律を守り秩序を紊

さす社會をつくり勤勞を果す點は或は蝶よりも尊重すべきものではないであらうか。

凡て世界を通じて自由と制限とを抽象して考へる時には後者の價値あることを知るのである。

自由は過去の經濟組織を生んだ。スミスの經濟も此の自由から生れたのである。ミルの經濟學は自由と制限の間に悩んだ。そは彼が過渡期の經濟學者たる所以である。

自由は歐洲文明に色々なものを生んだ。

今日の日本に於て存在する悩みと罪とは大部分此の自由から生れてゐるのである。

靜かに經濟眼を開け。ラスキンの教を通じて今日の日本の状態を見るならば五十年前の英國の文化と五十歩百歩である。

物質的幸福者の生産及び所得は永久に勤勉なる勞働と相伴はなければならぬことを忘れはたしたのである。自ら耕やさずして食し自ら織らずして着やうと

企てゝゐる者の多きことよ。

或る分量の善は或る分量の勤勞によつて生れたものである。

善とはラスキンの財である。勤勞とはラスキンの勞働である。私共は此の勤勞といひ善といふものに物質的の考へを附着して思索するのが人間としての正しい道と思ふ。

食物を欲しい者は食物の爲に勤勞せねばならぬ。快樂を欲するものは其の爲に働かなければならない。

然し私共は斯の如き法則がミルやラスキンといふ先哲から示されてゐるといふ事實を何時も忘れ勝である。そして其の結果として私共は何物も得ずに無學と不幸の儘に終るか或は外の者の勤勞を我がものとして外の者の積んだ善の結果を獨り占めにせんと謀るものである。

我々物質的に幸福なる者は他の者の勤勞を我がものとしてその結果のみを自らのポケットに収めて終ふ傾向がある。

私共は斯して知らず識らずの間に暴君となり盜賊となる。

ラスキンは聖書中特に詩篇と諺語中から貧しい者に壓迫を加へることの罪を教へた數行を掲げてゐる。そして不正なる幸福者が貧しい者に對して加へる行為は貧しい者を蔑視するのみならず壓迫することであるといつてゐる。

物質的幸福者が乞食を蔑視し彼等の存在を忘れた様に眼をそむけてしまふのは常である。帝國ホテルの前の橋の左側にはよく乞食が坐つて居る。私共は誠に不愉快な心持で此を見る。然し彼等を壓迫し彼等より何物かを奪略してゐることを考へなければならぬ。聖書中の句

貧しい者が彼の網にかゝるのを待つて此を奪ふ。

といふことに私共は反省せなければならぬ。斯の如き網にかゝる者は彼等の不注意と怠慢から出る場合もある。然し彼等の網は生計困難といふ網である。

我々は縦令へおぼろげでも經濟眼を開かなければならぬ。そしてラスキンの言葉

我々は他人の所得を奪ふ爲に或種類の攻め道具を用ひる。我々は拷問機

私は大學生の時に河上博士より經濟組織の缺陷とそれより生れる不徳と悲惨とを學んだのである。同教授の貧乏物語は現今の經濟組織の缺陷を指摘したものである。

我々は偶然の運命と此の經濟組織の缺陷とを默視してはならない。

ソクラテスの徳行とプラト一の學識とエパミノダスの志操とを以てしては私共の心中の蟲である「無知の掠奪」を反省することが出来ない。或人はマルクスに學んだ。然し私はラスキンに私淑して此の蟲の體内に潜伏する事を知つた者であるが尙且つ此の寄生蟲を下劑によつて排除することを得ない者である。

物質的幸福者に恵まれた富といふ賜物をしてそれより生ずる力といふ不思議な運命の才能、私共は此に就いて反省せねばなるまい。富の中に美と徳を見出

さなければならぬ。

自然は神の賜物である。そして自然に育まれた美は神より賜つた力である。我々の力も神の賜物である。我々の地位も運命の神々によつて支配された賜物である。我々が物質をつくるに用ひた力は神々より賜つた智力や體力によつて恵まれたものであるからやはり神の力である。

何故に貧乏人が生れたか。何故に物質的幸福者は彼等を蹂躪し飢餓に悩まされしむるか。

何故に我々は惨々に此の貧困者を利用し盡すであらうか。

若しも貧乏人を愚人とするならば

愚人の此の世に出た理由は賢人をして彼等を世話させる爲なのである。實に強者賢人がその周囲の社會に對する關係上彼等の爲さざる可からざる義務なのである。強者が弱者を壓迫せんが爲に力を附與せられたのではない。弱者を扶助し指導せんが爲である。

ラスキン

何をか物質的幸福者の務とする。寡婦に住居や金錢を與へるのではない。労働者や病夫に食物や藥劑を給與する慈善ではない。

ラスキンはトルストイと共に美名の慈善を排斥した。

富める者の怠惰な生活が慈善といふ美名に慰められて尙貧民の過勞や缺乏を増加せしむるならばそれは何物にも比すべからざる罪惡である。悪用された富は蜘蛛の巣と等しく善用された富は海の底から人間の靈魂を救ふ神聖な漁夫の投網である。

ラスキンの世界の富とは美と徳の富である。國家を指導する責任は確に富を有する凡ての人が此を負擔しなければならぬ。

ラスキンは富を自らの勞働に對する報酬として各自に此を自己の權利に屬する財産と看做し自己の快樂の爲に消費するの自由をも是認した。然し富を以て得らるべき其の快樂は決して利己的のものであつてはならない。

彼は嘗て如何なるものが眞の富で如何なるものが偽の富であるかを論じた時「私は固より富に對して深い尊敬心を抱いてゐるものである」

といつたが彼の尊敬する富とは

「唯だ生あるのみ。生といふ其の中自ら此に伴ふ愛の力歡喜の力讚仰の力凡てを含むなり。最も富める國とは、最も多數の高潔にして幸福なる人間を養ふ國、最も富人とは己自身の生の力を極限まで完成せしめて、その人格に依り、その所有物により、他人の生の上にも最も廣く有益なる感化を與ふる人をこそいふなれ。」(石田憲次氏譯「此の後至者にも」第二〇六頁參照)

の謂であつた。靜かに考へれば考へる程最も多數の高潔にして幸福なる人間たるには誠に難い哉である。

誠に富める者の態度は貧しきものゝ努力よりも至難である。現今日本に於ける状態は特に同じ問題に富者も貧者も悩んで居る。理想的國家を人間の集る社會とする以上物質的幸福者は此を指導する責任を持たなければならぬ。

其の有する富と金錢を慈善の爲に使用する方法に就いては彼等は幾らか此に手加減を加へることと又他方に於ては自らの勞働に對する報酬として富める人がそれを自らの權利に附屬する財と看做し自らの快樂の爲に此を消費するの自

由をも又是認しなければならぬのである。

富を以て得られる本當の快樂は利己的のものではない。然し多くの勞働者が富を欲する目的は多くの場合自己満足の爲である。然れば神聖に獲得した富を我儘に消費することを攻撃し勞働者の生氣を阻害する如きは倫理上も政策上も誤りである。

吾々は自分で儲けた財産と父祖より受けついで財産との間に區別をつけねばならない。殊に其が土地の収入でもある場合には最も重大な責任を負擔するものである。

ラスキンによれば其の當時の英國の状態に於ては富める者と其の周圍の人々の關係に就いては一般に經濟學者が考へてゐる所とは全然正反對のことであつた。本來富める者は其の周圍の人々に向つてどの位その財を使用して良いかといふことを考へてゐなければならぬ筈である。然るに彼等は眞の富豪といふものが多額の資金を運用する天命を受け繼いでゐるにも拘はらず反つて彼等の新しい慾望を挑發し周圍の貧民に對しては只單に社會の恩惠者といふ虚名を

受くることにより満足し有用なるものゝ生産を阻害してゐるのである。

「慾望が進歩の原因であると云ふ様な説は經濟學者が容易に賛同しない所のものであると私は思つてゐた。然るに意外なことには彼等は餘りに此を信用し過ぎてゐた。

英國民は將又一個人としても奢侈を慾すれば必要的に他の有益な事物から其丈の力を奪ひ去るものである。故に如何なる國民でも其の貧民が相當に衣食の足りる迄は斷じて自分丈贅澤をする權利は無いのである。

文明生活の或る種の奢侈品は此を所有してゐても無害である場合がある。又此を慾求しても反つてそれは人間の奮發心を起さしむるに止まるのだ。然し斯の如き善良な場合を考へて見ても私は國民たるものは或る一定の制限以外に奢侈に耽ることを禁じなければならぬ。」

ラスキン

ラスキンと讀書に就いて

河上博士の社會問題研究第一冊中に「思索の必要と研究の態度」と題する論文を讀みし人は吾々がものを考へなければならぬこと、そして斯の如き態度にて偉人の後を辿ることが干要であることを知つたであらう。

それは確か大正七年九月の初めの頃であつたらうと思ふ。私共九人の學生は河上教授の經濟學演習を學ぶの時その最初の講義に於て「將來地上に残存し得べき人間はMan who thinksである」といふスマート教授の言葉やものを考へなければならぬが良いことを上手に考へ様と思へば大思想家に就てNacht Denkenをなすことが最も特策の様であるといふ同博士の靜かな教を傾聴したのである。

私は靜かな京都の秋河上教授の細いきりつとした姿から漏るゝ言葉を聞いて感激をした一人である。

茲來私は色々の誘惑の中にも兎も角も物を考へなければならぬといふことを忘れたことはなかつた。カフェーで酔拂つた時も鍵屋と云ふ菓子屋であく程喰つた時も南座と云ふ芝居小屋へ唯一人足繁げく通つた時も Nacht Denkenの二字はどうしても忘れることが出来なかつた。私は將來ラスキンを研究し様と思つ

たのも實に河上博士の感化である。私のみならずどんなに多くの學生が此の生きた學者の姿と魂に憧憬れた事であらうか。同博士の價値は死ななければほんとはわかるものであるまい。私は殆んど先生と親しく話したことがない。私と同じ様な境遇にゐて同じ憧憬を持つた人々が京都の學窓に多勢あることと思ふ。私共の思索は所謂文化的なるものよりも寧ろ傳統的のものゝ中に價値を見出すのである。古いものに對する私の愛着心は師弟の關係に於ても主従の關係に於ても同僚とか仲間の關係よりもすつと貴く見出さるゝのである。

斯した歴史を尙ぶの心持や古英雄を慕ふ心持は私には大思想家の著述を讀むことによつて充されるのである。人間の一生は短い。

此の短い一生を通じて私共の思索し讀書し得るものは最も小部分に限られなければならない。經濟學者が美術の書を繙くは趣味と慰藉とにその價値を見出すのであつて決して學問としてその専門とする經濟學と同席せしむることは出來ない。

況や私の如き商人の子が唯だ親のすねのみを嚼る場合ラスキンの思想を研究

せんとするのでさへもおこがましい次第である。

* * * * *

先哲の書を読むに當つて最も必要なことは

(一) 虚徳實歸といふことである。即ち謙遜に頭を下げて自己を空虚にして然る後先哲の書に對しなげはならない。

(二) 他人の思想を理解するが爲に少しと雖も豫め成心を抱くことなき様従つて此に向つて少しも自己流の解釋を下してはならないことである。

(三) 書を読むことによつて己自身が著者の心の中に這入るといふことである。即ち我々は著書に表はれた文字を得んとして著者その人が嘗て見た所のものを今自らに著者その人が嘗て味つた所のものを今自ら味ひ著者その人が嘗て體得した所のものを今自ら體得しなければならぬ。(河上博士著、社會問題研究第一册第十頁以下参照)

ラスキンは嘗て次の様な事を云つた。書物を読む方法には如何にすれば書物を読むことが出來如何にして書物を読むべきであるかといふ二つは此を區別し

て考へなければならぬ。そして此は嚴肅な問題である。又随分廣汎な問題だと云つてゐる。

如何にすれば書物を讀むことが出来るかといふ問題に就いては彼の經濟論と教育論が現出するものである。私は此に就いて詳しく述べることの出来ない者である。

如何にして書物を讀むべきかといふことに就いては彼の *Sesame and Lilies* を通讀せし者には最も詳しく了解さるゝならんと思ふ。

ラスキンによれば如何なる書物をどう云ふ風に讀むべきかといふことは即ち何故書物を讀むべきかといふ問題になるのである。吾々が教育と文學との普及によつて受けた便宜は吾々が教育の眞の目的は何であるか又文學の教へる所は何であるかを明かに理解して始めて正しく其を利用する事が出来るものである。善導された道德上の訓練に精選された讀書とは吾々の如き迷へる者無學なる者を支配する力を吾々に與へるのである。正しい道德上の訓練と精に選ばれた讀書とが人間の有する限りの最もうるはしい王權を吾々に附與するものである。

讀書は誠にラスキンによれば人間の糧である。日本の人間は割合に讀書に對して冷淡である。外國を旅行しても船の上を歩いても頻りに讀み耽つてゐる白髮の老人や若い娘さんたちを目撃する時人間としての懐しみが私の心裡に浮ぶのである。

ラスキンの讀書論を見ると色々の注意がその方法の上に散見される。次に略記する所のものは河上博士譯のラスキンの讀書論中の一部を要約したものである。

「彼等によりて教へられ彼等の思想を體得せんとする眞實なる希望を有することこそ第一である。而も彼等の思想を體得せんとすれば只之を味はへ已自身の思想が彼等によりて言ひ表はされ居らざるかを詮索せんとする勿れ。其書の著者が汝よりも賢き人に非らざれば汝は此を讀むの要なし。又彼にして果して汝よりも賢者なれば多くの點に於て彼は汝とその考を異にするだろう。少くとも汝は著者の意見を知らんが爲にその書を讀むのであつて汝自身の意見を發見せがん爲に非ざることこそ心得なけ

ればならぬ。」

私共は小さい時から嚴密に友人を選択せよと修身などで學んだのであるが實際此をなす丈の力ある者は少數である。又良友は良友と交り悪友は悪友ばかりと交つても困ることである。時として悪と善との混合と調和が必要であらう。ラスキンは讀書を友とすることによつて吾々が自分の欲する人を知ることが出来最も必要とする時に彼を自分の傍に引き付けておくことが出来ると云つたのは洵に名言である。

「然るに茲に又一箇の社會がある。そは何時も吾々に向つて解放せられ吾々の地位階級の如何を論ぜず吾々の好き次第に何時迄も長く話しすることが出来而も出来得る限りのうるはしい言葉を以つて吾々に物語り吾々が若しも誠心を以て此に耳を傾くるならば先方から反て感謝の心を以て待遇してくれるであらう。」

此の一つの社會とはラスキンの所謂讀書によつて吾々が「逍遙し得る質素にして靜肅なる社會」である。

吾々の此の社會に於ける先方といひ友達といふ所のものは書物でなければならぬ。而うしてラスキンは一切の書物を大別して一時的の書物と永久的の書物とに分つて居る。

彼が此の區別をなしたのは決して性質上の區別のみではなかつたのである。悪い本は永續せず良い本は永續するものとは必ずしもきまつてゐなかつた。一時的の良書もあれば永久的の良書もあり同時に一時的悪書永久的悪書もあるわけである。永久的良書につきては説明を要しない又悪書に就いてはラスキンは物語らなかつた。然し彼の一時的良書とは次の如きものであつた。

我々の直接に此を談話し得ざる人が我々の爲に印刷しておいた有益なる講話又は面白き物語りである。

面白い紀行文とか氣の利いた時事問題に關する議論小説流に書かれた生氣ある誠のこもつた物語りとかいふものであつて此の一時的の書物は我々の教育の普及するに従つて増加するものである。我々は此に感謝しよく利用せなければならぬ。

新聞紙は朝飯を食べながら讀むには誠に結構ではあるが決して此を終日讀むべきものではない。

我々は一時的の良書をしてその書物としての誠の地位を失はしめてはならないのである。たとへ書物の形をしてゐたからと云つて又折々此を参照する必要があると云つても此を嚴密に書物とは稱し得ないのである。書物は話されたものではなくて書かれたものである。而もそれは單に傳達の用をなすものではなくて後の世に傳ふるが爲に書いたものである。

我々が書物を書くのは單に聲を増加する爲でなく又此を運搬する爲でもなく此を保存する爲である。

著者は自分が眞と認め有益と認め或は美であると認めた所をいはんと欲するのである。

實に書物は著者の小さな人間的方法と彼に下された眞の天恵と福祉との程度に應じてなされた彼の墓碑名である經典でなければならぬ此がラスキンの眞の書物であつた。

ラスキンの頃英國の思想界は我國の現代に於ける如く實に混沌たるものであつた。

彼は其の當時の英國民の心理状態を以つてしては到底眞の讀書の出来るものでないこと大文學者の文章の一句でも到底彼等に理解されざること當時の英國の民衆は深遠な書物を理解することが段々不可能になつて來たことを歎じてゐる。何故に英國民が讀書の趣味を没却して來たか。そはラスキンによれば世の凡ての人が何事も金で解決がつくといふ貪慾な思想に沈入した爲である。併し幸にして斯の如き弊は深く内心に及んだものではなかつた。

ラスキンはカーライルと共に警鐘を打ち鳴らしたのである。そして本能的な無分別な道徳は決して永續すべきものでないこと如何に其の心が寛大であつても其の國民が亂民となる様な民族では決して永續出來ないこと一度拜金宗の亂民となつた國民は慘ましくも文學や科學や藝術を輕蔑し自然や慈悲や福祉を排斥するの愚をする事をかこつたのである。そして此等の悲劇は只靜かなる讀書

に求めなければならぬこと。讀書の訓練以上にもつと嚴肅なる訓練を必要とするも現在の如き心の状態を以てしては兎も角も讀書に俟たなければならぬことを切言してゐるのである。

書物に關する費用は贅澤な食事の費用に對して如何なる地位を占めてゐるであらうか。吾人は肉體の食物と云ふことをよく云ふが其と共に心の食物といふことを忘れてはならぬ。良書は無盡藏な食物である。

良書は生涯の準備である。

英國民は富強な國民であると誇りながら争つて貸本屋の書物を手垢で汚す様な有様であるのは何たる醜體であらうか。人生は短い靜かな閑を得ることは極めて難かしい。つまらない書物を讀んで此を空費してはならない。價值ある書物は苟しくも文明國にあつては美しい體裁に印刷して相當な價格を以て何人にも行渡る様にしなければならぬのである。此を醜俗な形にしたり活字を小さくして吾々の視力を害する様にまでして餘り安い値段にしてはいけない。何となれば吾々は決して多量の書物を

要せぬ。印刷の美しい紙質の上等なとち方の丈夫な書物であればよいのである。

吾々はたとへ徐々なりとも制限的な有益な儉約をして一生の間役に立つ良書を蓄積し小さな書庫を家庭の必需品としなければならぬ。王者の寶庫とは正に書庫のことではなければならない。

嘗て私は「ラスキンの經濟的美術觀」なる小著にラスキンの奢侈慾望に關する論文を掲げておいた。そして彼の奢侈論が相對的であることを述べたつもりである。彼が書物には出来る丈良い紙を用ひ良い表装をせよと云つたのも彼の奢侈論の反映でなければならない。

科學とラスキン

一九二四年大正十三年三月二日は故菊池泰二君の満三週年忌であつた。美しい夕日を浴びて谷中の墓に詣ふでし時ラスキンの科學論を想記して其の夜歸宅後直ちにこの小文を綴る。彼はケンブリッジに學んで惜しくも此の世を逝つた。彼がベテイクユリーの宿舎にて私に恵みしゴリキイの「三人」は震災の爲めに焼かれ、菊池家より贈られし寫眞像も失くなつた。日本の大科學者の子に生れて科學者として勉強せし (Cavendish Laboratory) の彼を追想して此の拙文を掲ぐ。

ラスキンは或程度迄現代の物質的文明を呪つてゐたのである。従つて物質文明の齎らした科學といふものに對しては此を全然是認することは出来なかつた。或論者は近代の科學を以て迷信であるとなし宗教上のドグマと等しく人心を惑亂するものであり人生に有害無益であることを叫んでゐる。極端な唯心主義者は社會主義を憎んでゐるがその理由は社會主義が主として科學に立脚するからである。

ラスキンが科學に對する態度はその藝術觀と科學觀に立脚することに私共の注意を惹くのである。

然し乍ら彼の論據は何時も科學否定論ではなく徳と美を玩味した道徳的又は美術的科學論である

英國民は科學から利益をあぐることならば喜んで此をする。吾々は科學そのものに肉がくつついてゐるならばその骨にまでもかぶり附くのである。然し乍ら一度學者が吾々に對してその残つた骨でもパンの屑でも此を乞ふ場合には「それは別問題」だと云つてはねつけて終ふ。

此はラスキンの科学を蔑視してはならないと云ふ數行の警句であるが斯く科学を一方に於て尊重し乍らも又他方に於ては科学を以て精神的労働を阻害し分業と云ふ美名の下に科学が特権階級の利益のみに扶助をなす所の學問であることを云つてゐる。

ラスキンによれば今日の時代に於ける最も激しい機械的傾向(科学の萬能を説く傾向)は要するに半ば機械的であり半ば子供だましの一時的熱病であつたのである。

鐵道や電信は野蠻國民を啓發するのに非常に有益であつた。然し鐵道以外に何も知らずに蒸氣と火藥以外に傳へるものがなかつたらどうであらうか。然し此以外何か與へるものがありとすればその何かを傳へる爲には初め鐵道が役に立つたのである。従つて問題は何か何であるかといふことになる。

或る人は宗教であらうと云ふ。然し若しも眞に宗教を傳へ度いと思ふならばラスキンが生れし頃一八〇〇年前に蒸氣の力をからないで爲し得たことと思ふ。ラスキンの知つてゐた凡ての善良な傳道事業の大半は徒歩で行はれたのである。

る。

思ふに斯の如き事業は歩いて行く速さ以上に容易に出来ることではない。

然らば科学は如何であつたらうか。

吾々は野蠻人を説いて彼等に衣服を着せることが出来た。白いパンを食はせて醫術による骨の接ぎ方を教へた。

併し乍ら吾々が楽しみとする競馬や夜の舞踏や高價な音樂贅澤な衣裝富や權力や地位を得んとするの苦勞その他安息なき怠惰目的なき色々の仕事等は如何に野蠻人に教へた所で愉快な事ではあるまいと思ふ。

ラスキンは云つた。凡て眞の健全な快樂は人間が初めて土から作られた時も今日も同様に楽しむことが出来るものでなければならぬ。そして吾々は心を平靜にすることにより初めて楽しむことが出来るのである。

延び行く麥開く花を見守り鋤鋤の上に苦しい呼吸を吐き讀み考へ愛し望み祈る此が人間を幸福にする眞の仕事であつた。

斯様な仕事をする力は此迄人間に始終備つてゐた。此れより以上の事をする

力は將來決して人間に得られなかつたのである。

私共の幸運不運は此れ文のことを知り且つ教へるや否やにあるのである。決して鐵や硝子や又電氣や蒸氣はその科學といふ基礎を以つてしても此れ文の力はないのである。

ラスキンは斯く信ずる程に *Unhappy* であつた。彼は近世畫家論第三卷第十七章に詳しくその心持を述べてゐる。彼は自らを稱して狂信家といひ理想家であると云つてゐる。彼の眼から見れば世間は既にあらゆる方面に様々の實驗を試みたけれども正しい方面は忘れてゐたのである。世界は賣買し戦争し斷食し政略や野心や克己で己を疲らしてゐる間に神は自然は誠の幸福を路傍の苔や大空の雲の中に託しておいたのである。

世間はうるはしい苔を踏み躪り雲を忘れひたすらに幸福を求め遂にまぐれ當り乍ら遅時にも自然科學が起つたのである。そして事物の觀察文ではなく事物の新しい用ひ方を發見しやうとした。云ふ迄もなく世間は斯様な物質の利用のみが幸福の源であると考へてしまつた。

ラスキンは云つた。

科學の効用は第一の怠け勝の空想状態から第二の有用な思考状態に人間を引き上げる點にある。然し乍ら此の第二の状態に吾々を拘束し更に一層高遠なる思索に進まんとする吾々の心を抑制する點に於て恐るべく又非難すべきものである。

科學的研究は其の性質上或る種の人々にとつては斯る思索と矛盾しないかも知れない。然し乍らそれには本當の努力が要る。

科學的研究は吾々の感情を冷却し抑壓し萬事を微分子と數量とに分解しやうとする傾向があるから常に高遠な思索と矛盾するのである。

ラスキンによれば有限の人間が限りなき自然や神の事業に對して常に限りなく無知であるのは元來人生の法則であつた。然れば吾々は本當に只一つの花の秘密もさぐることは出来ないのである。又ラスキンによればそれをさぐるのが本意でもなかつた。寧ろ科學の欲する所を絶えず美の愛によつて抑制し知識の性格を常に人間の情のやさしさによつて控へるのが吾々の本分であつたのであ

る。

科学の任務は人間に奉仕することである。

吾々は電信や電話や蓄音器を發明した。併し如何なる改善を人民の生活の上に行つたか。吾々が藝術と共に科学を人間に奉仕せしめることの出来るのは只科学者や藝術家が眞に人間の間に住み吾々の生活するのと同じ方法で生活し何等の要求をも特別に人間の上に負はさずして人間が彼等を歓迎しやうがしまいが凡てそれ等を吾々の普通の人の自由意志に委してにおいて其の後初めて彼等の科学的又は藝術的奉仕を人々に爲した時に科学と藝術の奉仕が分明するのである。

ラスキンは科学者の人民の爲に自己を犠牲とするに非らざれば彼等の権利の義務を生ずるものでないことを説いてゐる。

科学は常に最も平明なそして最も廣い言葉の意味に於て存在した。科学はその効果を自己の利得の爲でなく自己犠牲によつて實現すべきものでなければならぬと同時に一切の人普通の人に理解されねばならないことである。

近世文化の發達は色々の利益を社會に齎した。ラスキンは此を否定しなかつた。又多くの害毒が此に伴つてゐることは彼のカーライルと共に烈しく指摘した所である。

吾々が自然と共にあり温い自然の懷に抱かれてゐる時は本當に幸福である。

此の美しい自然を離れて吾々は何處に幸福があらうか。ラスキンの教は人と自然との共存を説いてゐると同時に自然も亦人間の力によりて初めて此の世の美を現出したのであることを説いてゐる。

自然はキリストの十二使徒に於けるが如く吾々の力を解釋者とせねばならぬのである。凡ての藝術はそれが最も崇高なるものである時は何時も人間の力と人の力との共鳴を證明するものである。

吾々は自然と藝術を分離することが出来ない如く自然の美にそむく科学の濫用はラスキンの教旨によりどうしても此を許すことが出来ないものである。

私共は近世科学の影響を受けたラスキンの科学觀をその藝術觀と共に自然觀に結び付けなければならぬ。そして近代の科学が只單に自然を征服しやうと

してゐるに反しラスキンの所謂「人は自然と共に住まなければならぬ」といふ自然に存する倫理を熟考せねばならないのである。

「凡て人の性質に避く可からざる弱點があり墮落を免れないものであるとするならば凡ての社會的の活動は人々の不道德な慾求にその礎を持つべきものであるといふことが必然の結論となるのである。此は近世の所謂社會的科學によつて信奉せらるゝ恐るべき信条である。そして此は實に吾々の日常生活に甚大の影響を及ぼすものである。然れど吾々が自分の本來有する所の力と才能とを尊重する習慣を作る時は段々此を養ひ働かすことによつて人類全體に誠の力と尊い感情とを發達せしめ本當の社會的科學の基礎を作り得べきものである。」Ethics of Dust 序文より。

ラスキンの見た都會建築

私は彼の建築學的の理論を知らない。たゞ彼の綜合藝術としての建築についての感想を知れるのみである。
なつかしい江戸は焼けた。想ひ思ひに打ち立てられた私人の家々が倒れたり灰になつてしまつたので急にこの筆を取る氣になつた。(一九二四、二、二〇)

ラスキンの心の中には古いものに對する愛着心が随分多量であつた。

古代希臘の衣食住等の生活様式が古い伊太利の建築アルプスの村々に散見せられた建築上の趣味として此等より生れ出た人間と道德上の關係は彼の詩情を最も刺戟したのである。私達の魂の中にも新しいものよりも古いものを尊ぶ心持がある。丸の内ビルディングの耳隠しの女性よりも新橋藝者の丸髷姿や銀杏返しの可憐な姿が懐しいものである。

古いものに對する愛は新らしいものに對するよりも自然である。

ラスキンの本性には現實でないものに對する愛が多量にあつた。それは洵に彼の自然に對する憧憬であり理想であつたのである。

古くさいものは時代遅れといふ言葉の中にも彼は人類の眞の文化の意義と價値とを發見したのである。

私は未だに昔の主従關係をうるはしいものと思つてゐる。師弟の關係は誠にうるはしくトマスカーライルと彼との間に結ばれたではないか。

僚友とかマイフレンドとかの關係よりもラスキンとロゼツチの間には深く結

ばれた師弟の關係があつたのである。

倫敦にゐて最もポピュラーに使用せらるゝ言葉は Sir, thank you, Sorry, Beg your pardon, の四語であつた。倫敦から紐育に渡つてしまふと此等の言葉が大變に影をうすくするのである。米國にはハイヤシンスの様な職業婦人が多いけれども英國や大陸には萩やすゝきの様な感じのする妻女が多かつた。

私は古風のみを尙ぶことが必ずしも人間趣味の極致とは考へないと同時に新しいものを愛することのみが尊い趣味とも思はない。私共は便利な自動車よりも静かな馬車の優美なことをラスキンより學ぶものである。そして私は今傳統的なるものを尙び新文化的なるものを必ずしも前者に優るものとしなない心持にて彼のエディンバラ講演一八五三年十一月一日同じく十一月四日に蘇國の都でされた建築上の問題に關しての講演を讀んだのであるを讀みしが故に筆の歩むまゝに左に拙文を綴るので。

* * * * *

世界の國々の中で一等美しい都と思つたのはエディンバラ市であつた。私は

約二ヶ月此の都に滞在してプリセスストリートのロイヤルホテルから毎日の様にラスキンやカーライルやアダムスミスの遺跡を訪ねたのである。

自然美に恵まれた都とは此のまちのことであらう。日本の京都は此の都である。

然しラスキンの眼には

「エディンバラの都程よい建築によつてその美を損せられた都會は他に見られない。」

と映じたのである。

此の都の周囲の山河の美しさは自然そのものゝ誇であつてエディンバラ市民の誇ではなかつた。その附近の歴史的建築物は彼等市民の先祖の誇であつたけれどもラスキンの講演を聞いた市民の名譽ではなかつた。

只彼等の手になつた新しい市街は近世の建築上極めて質素であり強健であるといふ點に於て他の孰れの都市にも勝るものである。

然しラスキンは彼の眼に感ずる美しさが新市街を取りまく周囲の自然の風景

に負ふ所が多いといつてゐる。彼は街そのものに對して餘り興味を感じなかつたのである。

彼はアルプスの連山を控えたかのペロナの都を追想してその周囲の風景が甚だ壯麗であり雄大であるにも拘はらず街そのものにも無限の興味があることを力説して居る。ペロナの市街は確に世界に誇つてよい市街である。

斯の如き市街建築がエディンバラの都には數少く見出されたのであつた。

試みに震災後の銀座街を想へ。荒寥たる月の下に金高少く趣味に重きを置いて打ち建てられたる新市街を觀よ。

此の趣味が良趣味であるか悪趣味であるかは別問題として震災後といふ自然の力より湧く同情と荒寥たる自然美を無視しては此の市街は全く價値なきものである。新味はあつても何處に古風といふ美があらうか。私共はラスキンのエディンバラ市觀より學ぶこと多きものがある。

ラスキンによれば都市街の美は如何程立派な公共の建築があつても古人の建築物が此を助けなれば何の役にも立たないことをいつてゐる。誠に市街を造る

ものは新しい學校でもなければ新しい病院でもない。

市民の周囲の建築物は市民の趣味から割出されなければならぬ。いくら澤山の金を出したからといつて決して良建築は得られないのである。市民の美と徳と經濟に對する善良なる了解がなければ又市民の日常の建築に趣味を持ち注意を拂つてゐなければ良建築は建立せられないものであり良市街は得られないものである。

ラスキンは或朝プリンセス街の軒々の窓を檢べて見た。そして單調な同じ形の窓が此の街の片側に六百七十八あつた。

ラスキンは此の窓の單調ではあるが然し凡ての裝飾を排斥した點に於て男々しい氣力に富んでゐることをよく知つてゐた。然し乍ら我々が花束を作る時に同じ薔薇の花を用ひるに際しても大小異つた形のものを組み合せてその美を損じまいとするのである。然るに不思議にもエディンバラ市民は十五萬の同じ窓を同じ街に並列させて尙それに興を感じ様とするのはあまりに無限ではあるまいかといつてゐる。

ラスキンの説によれば凡そ藝術上なす甲斐あるものは此を成就した時に人の興味を引かなければならないものである。凡そ正しいもので不愉快のものはない。

世間には自然を捨て、下等な人工を愛することが少くない。然し彼の所謂勝れたる藝術品とは人が若しも此に注意すれば必ず人を喜ばす力がある。若しも人が此によつて喜ばなければ其の人自身が悪いか藝術そのものが悪いか二者孰れかである。

私共は建築に興味を感ずること少きものである。私共が東京市街を歩く時建築といふものは元來他の藝術品程面白くないものだと思定して何の興味もなく過して終ふのである。

然し我々が凡て建築家たることが出来ないから此も已むを得ないことであるとして是認するのは餘りに愚である。

ラスキンは「建築は凡ての人の學ぶべき藝術である。建築は學ぶに甚だ容易きものである。萬人皆建築家になり得る者である。此を知らない者は恰も文章を

綴つたり文法の出来ない者と同様である。人々が將棋やかるたを學ぶ丈の勞力を使用するならばゴシック建築の重なる構造の原理は此を學び得るのである。」といつてゐる。

ラスキンはエディンバラ市の建築を見て近世建築上の一大誤謬が偶然窓や破風に表はれてゐることを歎じてゐる。此の一大誤謬とは

近代の建築家がやはり近世の愚な政治家と同じく Equality とか Similarity とかいふことが大變好きであつて一つの建築の各部分が凡て他と同様でなければならぬと考へてゐる。所が自然は平等とか類似といふことは大嫌であつて愚な政治家や愚な建築家と全く正反對である。

との謂である。ラスキンの美とは人間の魂を絶えず力附ける爲に神の定めた要素の一つである。

我々は平等とか同等とかいふことに拘泥してはならない。人間が飽きる怖のない様な極致の美といふのは稀なものである。

斯様な美の極致に接する時我々は強くそれに引き附けられて永くそれを記憶するものである。建築上我々は美の爲に往々不必要なことをしなければならぬが決して美の爲に不便なことをする必要はないのである。ラスキンは何時も唱導してゐることであるが凡て優良な建築は單純な住宅建築から發達することゝ従つて大寺院でも大宮殿でも又は公共的建築物でも此等を建築しやうとするには先づ住宅の入口とか屋根窓に就いて良い研究をしなければならぬ。

彼は田園都市の風景が此に配せられた田舎家によつて大いにその美を増してゐることを觀察してゐる。そして此の田舎家の屋根と窓がその建築上の眞髓であることを認め田舎家に斯くも必要な要素が我々の日常の住宅に輕せられる筈がないといつてゐる。

ゴシック建築に特有な Pinnacle, Tower, Spire, Tower などといふ言葉はラスキンの耳に一種いふ可からざる快感を與へた。

スコットランドの風景が斯かるゴシック建築の要素によつてその要素を増すのみならず蘇國の詩歌は此によつて一層の美を有するのである。

そして試みにスコットの小説からタレットといふ言葉を取去つたならばどんなにかその價值を失ふであらうことを彼は云つてゐる。

凡て建築は其の美に澤山金がかかるのではない。其の醜に反つてかゝるのである。たとへば其の裝飾が正當の位置を得ない爲に又其の仕上げ方が全然間違つてゐる爲に澤山の費用をかけざるを得ないのである。

ラスキンによると希臘人は時として見えないものに金をかけたがるものである。然し乍ら英國人や蘇國人は斯の如き事を必要としない寧ろゴシック建築がその微妙な彫刻を成る可く見物人の眼のあたりにおき眼の届かぬ所には大きく大膽の彫刻を施すことをせねばならぬ。無用は凡て奢侈である。縦合ひ立派な藝術品でも此を一富人の寶庫に藏するならば如何に善良なる保護を此に與ふるとも此の保護は全く無用であつて此の美術品は奢侈品となる。ラスキンは此の街のラットランドストリートの立派なお醫者さんの住んでゐる家々を批評して其の緻密な欄干が古代希臘の聖賢たちが屋根の上を散歩して此を眺めては喜ぶであらうと批評してゐる。

希臘の彫刻には細面といふ趣がある。然し乍らゴシック彫刻に細く手をかけたならば其の美しさを失ふのみならず又不經濟になるのである。斯の如きは建築上の仕上げの誤である。ラスキンによれば我々の社會的行動はごくつまらない行動であつても他人に對しては大なる影響を與ふるものである。僅な金を消費するにも其の消費の仕方に重大な責任の伴ふものである。殊に美術や建築に於ては左様である。

「將來はともかくも私が今日普及せしめたいと思つてゐる建築は近代の都市のおろかな贅澤や不體裁な機械や醜惡な裝飾などでは到底調和の出來ないものだ。今日の英國においては建築的流行が宗教的感情に助けられてだん／＼顯かになつて來た。時々蒸氣機關の背後や鐵道の腰掛など背後に一時的の絢やか怪しい裝飾などがあつたり煤煙に汚された花飾りなどが辛じて發見されるのである。私は自分の愛好した美術上の流派がかくも害せられるのを見てほんとに責任を感じざるを得ない。……私は止むなく鐵作りの市街やガラス張りの宮殿から去つて山嶽の靜姿や野の花の

趣きに逃れて行つたのである。」

ラスキン

彼は嘗て過去を追想してかくの如き悲哀を物語つたのであつた。(一八六八年ダブリン市にての講演)

其の頃英國に於ては美術や建築等の名の下に多數の金が消費された。然し其の名は此等の保護であつたけれども大抵は自分の氣に向いたり面白いと思つたものを買つたり建てたりしたのである。

それが美術家に如何云ふ影響を與ふるであらうか。それが英國の建築上に如何なる結果を與へたであらうか。

我々が美術の爲に費す金は一錢たりとも他人の精神に對して其の肉體に對するよりも遙に大なる影響を及ぼすものである。美術家や建築家の生活の健全であるか否とは我々によつて支配されるのである。彼等が自然を眺めて此を愛し考へ感じ楽しむか或は又彼等が自然に對して盲目となり荷を負ふ牛馬の如く機械的な單調な仕事に従事せしむるか是我々の指

揮次第である。

凡ての藝術には絶對的の正邪の標準が有することを充分呑み込まなければならぬ。我々は其の正しいものを選択して此を愛し折々の氣まぐれの嗜好を犠牲として我々兄弟の爲を考へなければならぬ。

一體建築は繪畫と異つて綜合藝術である。

一人の人が彫刻をするつもりで一軒の家を建てる。他の隣人が兩々相扶けて今一つの家を建築する。二軒の家が立派な一團をなし一軒宛別々に見たよりも遙に雄大である。況や街全體が一つの都市全體が相集つて彫刻上の壯麗なハイモニーを形造る時には一層の壯觀ではなからうか。

ラスキンの言葉をよく／＼咀嚼する時震災後の銀座街の思ひ／＼に建てられた建築物を見ては何處にハイモニーがあるかを疑はざるを得ない。

個々に所有する繪畫は單調に歌ふ歌の様である。よい聲のソプラノ歌手が單獨に歌ふ歌は勿論美しい藝術である。

ミレーの描いたエンゼルスの大作は單獨に眞の藝術である。然し私共は

集つて歌ふところの一大コワイヤーを想像する時その壯觀は又格別のものである。建築は一大コワイヤーでなければならぬ。銀座街の建築は一大合唱團としての價値がない。従つて綜合藝術としての建築上の美がない。

私共の一つ／＼の家々が協和隔合して一大音楽をなすならばどんなにか愉快であらう。

ラスキンは我々の快樂が我々の徳と同じく相互の扶助によつて増すといふことは自然の大法であることを教へてくれたのである。そして市街建築には寺院建築に見ることの出来ない一種の力と神祕さがあることを指示したものである。今日東京市民の大部分は一つの處に定住することが出来ないで所々方々を徘徊つて歩いてゐる。そしてそれが我々にとつて生活上の必要條件となつてゐる。その頃の英國に於ても同じ状態にあつた。彼等は常に自分の家を目して假の住居と考へてゐた。彼等は常に一層大きい家一層美しい家に住み度いと望み乍らも物質的壓迫から已むを得ず我慢し始終移轉せざるを得なかつたのである。

現代建築墮落の主要な原因は今日一場處に定住することが出来ないで所

々方々に徘徊ひ歩く點にある。今日の社會狀態では已むを得ない次第であらうが此が我々の禍であることを忘れてはならない。止められるものなら止め度いものである。

我々が生涯の或る時期に達して一個の家を選定し其れを自分の生死の場所となし得るならば實に幸福である。其の家に石の上に石を積む必要もない。土地の上に土地を加ふる必要もない。

只選定の時に自分の凡ゆる望を充すことが出来て又將來も又永遠に満足を與ふることが出来たら誠に幸福である。

我々は祖先の名譽を求めるとも子孫の敬愛を求め名門に生るゝよりも名譽ある追慕を受けた方がよいではないか。

ラスキンの此の言葉は我々東京市民にとつて誠に穿ち得た言葉であらうと思ふ。

彼の同情ある言葉は私達の心の叫に共鳴を感じる。震災で焼け出された人のみならず借家住居の人々には彼の言葉はほんとうに美と徳に飽くなき至言であ

らうと思ふ。

試みに我々が一個の家を小さくとも建てることの身分になつたと考へて見る時一層彼の言葉を我々は既味しなければならぬ。

美しいことのみが美ではない模倣を避けて自分に都合の良いものを作るがよい。若し此が爲に最良のゴシックが得られなくとも其はかまはない。

一番強固な一番大膽な方法で建築し然る後自分の空想をほしいまゝにして此を裝飾するが宜しい。聖書にも書かれた如く神の最も尊い賜を代表する様に私共にとつて最も良いものを作らなければならぬ。

ラスキンの述べし所彼の考が稍々ロマンティックでありユートピアであることを何人も感ずるであらう。然し乍ら彼のロマンズとは決してつまらないことを書きたてた小説ではなかつた。決して虚偽の別名ではなかつた。意志薄弱にして愚な又夢想的であり實際的でない放縱を意味するロマンティックでもなかつた。彼のロマンティックといふ言葉は思ひもよらぬ夢の如き美しさ美と徳を兼ねた立派さ氣高さを表示したものである。彼のロマンティック

クは忠烈なレオニダスの詩を示しホレーシヨ兄弟の最後の如く決してチペリウ
スやコンモダスの驕暴ではなかつた。

實際家と稱する美術家も建築家も稍々もすると斯かる心持を排斥するもので
ある。

ローマンスを感じる力こそは美しい氣高いものを見て喜び此に感激する人間
の最高の本能ではないか。

彼の空想的即ちユートピヤニズムは現社會に漲つてゐる「種々の罪惡や不幸の
最も根本的な原因たる美と徳の一致を排斥する」に反對する美であつた。

我々が何か一つの仕事を改良し様と思つてゐる時に其はユートピヤンである
といつて水を注ぎ勝ちである。

日向の武者小路氏の新しい村に對する世間の冷淡さを思ふ時同氏の眞のユ
トピヤニズムを私はラスキンと共に讚歎せざるを得ないのである。

ユートピヤニズムには不可能な分子が多からう。不可能なれば休む迄である。
若し可能なれば大いにやつて見なければならぬ。

ラスキンの建築上の教は此を空想的であり浪漫的であると排するは餘りに人
間の心が實際的であるからである。

ラスキンの徴利論

ラスキンとウスリイ (Usury) 論

元來英國國民は一般的の原理や論理的の追究に興味を有しない國民であることは英國の學者も將又大陸の學者も等しく認むる所である。社會改良論者及び社會主義者は資本主義の地代利子及び利潤を正面より攻撃することを欲しないものである。寧ろ資本主義經濟組織の必然的に生む特殊な經濟的社會的加害に對して此を攻撃する方が利巧であるかも知れない。若しも凡ての Usury が社會改良の進歩を障害するならば反つて地代や利子や利潤に不利益を與へるものである。然し乍ら實際なる英國國民にとつては必ずしも無効だとは云はない。地代利子利潤の倫理的批判は英國國民に於けるが如く近代の我が國民にとりては最も必要とする所である。今日に於て日本の勞働者に對する仁慈的の待遇は追々に確保せられて來た。工場法による勞働時間の制限職業の紹介老癈保險等に至る迄政府の施設が兎も角も改善せられて來たのである。急進主義者は此を以て手ぬるしとするが其れ程に性急にしても破壊を欲する人の心には反つて害ありて益

なきものである。

吾々は茲に於て眞面目に *Justice* に就いて心を開き胸をくつろいで考へなければならぬ。或る論者は地代利子及び利潤が根本的に破壊せらるゝに非ずんば正義と自由と博愛の實現を見ることは到底不可能であると云ふ。

又或る論者は此れ等を以て事物當然の結果であると考へてゐる。そして彼等は勿論地代利子及び利潤より生ずる害毒を止むを得ないことゝ承認してゐるが此の害毒の救済に就ては只單に地代利子及び利潤取得者の好意的親切即ち資本家の慈善家としての態度に俟つより外はないとしてゐる。

私は今此の二つの立場の孰れに賛同して良いか知らない者である。さり乍ら私の學びし所のものに於て又私の讀書せしものに於てラスキンは地代利潤利子を以て

A form of theft by rich from the poor

と稱し第二の論者が「資本主義に賛同するのは其の思想の根底に *Justice* が倫理的に許さる可きものである」といふ謬見を抱けることを指摘せる事を説明すれば足

りるのである。

ラスキンの此の態度に就いての根本的思想は一面彼の倫理観であつた。ラスキンの道德の目的は云ふまでもなく人類の福利であつた。人類の幸福は即ち倫理的目的であつて各人個々の幸福を獲得する爲には平等の機會を有するのが至當である。

彼の美術論が *Effect of Art on Public Morals* でありしと同時に *Effect of Public Morality*

on Art であつたが如く道德的の目的と云へば其の効果は人類の幸福以外には何物もなかつたのである。人類の幸福と云つても自己一人丈の幸福でもなければ又他人の幸福でもない。又舊經濟學者や倫理學者の所謂最大多數の最大幸福でもなかつた。彼の幸福とは公平に分配せられたる幸福即ち此である。

ラスキンは非資本主義者を以てモーゼの所謂第八戒を蔑視し掠奪を賛同するものとは信じなかつた。彼はもつともつと進歩して居たのである。そしてキリスト教的に非ざる倫理學的の立場ばかりでなくキリスト教の倫理學からも *Justice* の不道德なる所以を説いた。此の問題に就いて彼は次の如く云つてゐる。

正直にして常識ある人々は此の Usury の問題に就き只一人の思索によつて眞理に到達することが出来る。此に反する人々は何人の教を受くるも眞理に到達することは出来ない。

若しも此の説の現状維持に就き理屈や口實を發見せんとするならば虚偽の非難者はいくらでもある。最早や永く議論を戦はしてゐる必要もない。

Ruskin Library Edition, Vol. 38, P. 671—672

此の問題についての私の研究は自らの淺學の爲め一層困難を感じた。自分の参考とせし論文はグラハム氏の「ラスキンの徴利論」並びにライブラリー、エディンヨンのインデックスに表はれたクツクス氏の註を参照したものである。

(註) 1. The Harvest of Ruskin, Clapp, VII, Usury: I. W. Graham.

2. Library Edition, Vol. 32, Index.

ラスキンの思想は徴利即ち土地や資本の使用に對し労働者の負擔する賃銀即ち勞作に對する報酬より得るものなれば道德的に之れを見て全く不正である。

一八六二年に書れたるムネラムルベリスの商業中に徴利に就いての一般的概念

に就いて彼の思想が表はれてゐる。

徴利とは如何なるものたるを問はずその使用に依りて法外量 (exorbitant sum) を獲得することである。其法外なる獲得が貸借の上に交換の上に或ひは又地代の上に價格の上に行はるともそれが機會又は必要から生じたる何等かのアドバンテージに依りて得られたもので少しも労働の報酬に依る所なければ Usury たる可き所である。

ラスキンの徴利に含まる可きものはやはり普通經濟學者に依りて唱へらるゝ如く地代利子利潤の三者であらう。彼の正義と自由と博愛の實現を見んとするユートピアに於ては少くも此徴利が徹底的に破壊されなければならぬことであつた。今日私共の社會に於ては少くも此資本主義經濟學の爛熟し切つた世に在りては稍々もすると地代利子利潤を自然の結果と考へ勝ちである資本主義の肯定者並びに企業家資本家は此徴利から生るゝ禍害を他方に認めつゝもやはりそれは事物自然の結果たることを否認してゐるのである。従ひてその禍害を除かんとするの行爲は全く慈善家としての態度であつてやはり地代利子及び利潤

の三者が道徳的に肯定せられてゐるのである。

ラスキンの世にあつては徴利肯定論を否定する經濟學者が多數にあつても尙ほ是れを正面より實行せんとするものは殆んど無かつた。印度や濠洲や南亞に富裕な殖民地を持つて資本主義商業主義に發達した英國には當然のことである。

(二)

ラスキンは賃金を以て所得全部を生産した者の収入であるとしたものゝ如くである。又地代利子及び利潤を以てその所得に對し勞働をなさざりし者の手に歸する收入であると云つた。地代利子及び利潤の所得が倫理的に不正なる事を唱へしも彼であつた。又同時に *Justice* は即ち土地及び資本の使用に對し勞働者(生産者)の負擔する料金であるから根本に於て不正であると云つたのである。

今私はラスキンの利潤の意義や利子の意義や地代の意義を詳しく説明する力がない。ラスキンは地代に就いては可なりに詳しく説明してゐるが利子や利潤に就いて斷片的に説明するのみである。自分は讀書力の足らざるを悲しく思ふ。

讀者は著者の淺學に同情せらるべく又此の種の論文に手を下す事を笑ふ事なく思ふまゝに筆を走らせて誤謬と論理上の混雜の存在を海容せらるべきを衷心より願ふものである。

然らばラスキンの地代とは如何なるものであるか。又家屋の賃貸料とは如何なるものであるか。

ラスキンの地代とは云ふ迄もなく他の學者と等しく土地の使用に對する報酬である。彼に依れば地代はその如何なる種類のものであるとを論ぜず

他人の私有財産を借りる時に絶ゆることなく支拂ふ價格である。されば時に依りては其額が非常に少なきこともあり中庸を得てゐることもあれば法外に多なることもある。法外なる地代は唯單に無知なる然らずんば止むを得ずして地代を拂ふ人に依りて拂はれてゐるのである。斯くの如き強要は之れを制止する爲めにはその國家經濟上明白なる法律を設定することは最も必要とする所である。"Time and Tide, Later" XXIII

地代は土地の使用に對する報酬である。農業上の地代も永代借地料としての

地代も、又鑛山使用料及土地通行料としての地代も凡て是れに包含せらる。地代は時として土地の生産力を増加せしむる爲めに使用した資本利子を含む。又家屋に投資された資金の利潤を含む事もあるが是れ等は皆徴利に概括さるべきものでありて何れも土地及び資本の使用に對する報酬であつた。ラスキンの言をまつまでもなく今日の資本經濟組織の社會にあつては法律上土地及び資本の所有者は僅少の勞力若くは何等の勞力を用ひる事なくして是れ等のウズリイを收さめ得るのである。

徴利の語源並びに文學上歴史上の起源についてはラスキンも、アリストテレスや舊約聖書詩編等より引用してフォルスタライゼラ、ムネラプルベリスに詳しく面白ろく説いて居る。彼の經濟學が倫理學に礎を置く故に徴利に就いての觀察も經濟的科學主義によらずして經濟的倫理主義によつて居る事は讀者の注意すべき點である。

ラスキンが美を説いて社會の缺陷を指摘する頃倫敦に於いては資本主義の反影として様々の社會的缺陷がまさまさと識者の心眼に映じたのである。貧民の

居住せる家屋は其の地主に對して一割乃至一割五分に當る賃賃料を支拂つて居るのが普通であつた。今日吾人が東京に於いて支拂ふ家賃を考へて見るに時として私共は是以上を拂つてるかも知れない。ラスキンの所説をまつまでもなく貧民の僅かな財から支拂はるゝ地主の收入が減少するを防せがんが爲めには衛生上の設備を怠り其の爲め數百名の人間が非命に死する様な實例は彼の親しく目撃したところであつた。

ラスキンの社會改良家としての偉大なる點は其の實行家たる點に存した。彼の理想はあまりに遠大にして非現實的のものであつたが爲め不成功に終つたけれど彼はレントに於いても自らに二つの經驗を試みた。

- (一)借地權附きの彼の持家から五分のレントを徴收した結果是れまで一室を占めて居た家族が二室に住める様になり段々前途の希望が出來其上彼に五分の賃賃料を支拂つて尙ほ餘裕が出來た爲め此の家族は行く行く拾二ヶ年の借地權さへも買受ける事が出來る様になつた。
- (二)永代借地權附きの彼の家にあつては三分の賃賃料を取つた爲めに其結果

は前者と全く同様の慰藉を與へた。

斯くの如き經驗から彼は國家がよろしく成文法を以つて賃貸料の上に制限を加へなければならぬ事を力説した。其の當時行はれて居た經濟學の理論は過渡期のミルの所説ですらラスキンに取りては憤激に堪へざる僞學問でレントの眞意を曲解して富の濫用を辯護する道具であつたのである。

ラスキンのミルに對する批難は特にミルの經濟原論第二卷第二章の第五節及び第六節に關してのものである。其内に土地所有權は其所有者が土地の開發者たることを必要條件とする説がある。此説に對して土地と云ふものがある程度以上の開發出來ないものであるからある程度に達すればミルの説に従ふ。その所有權は當然終りを告げなければならぬのである。之れに就いてはラスキンは何等の攻撃も加へて居らぬ。又ミルの所説から當然生るゝ可き説即ち私有財産と云ふものゝ正當なる道理から推論して土地所有者が何等仕事もなさずして安閑として其上に住んでゐることは許されないことであると云ふこともラスキンに依りて容認せられてゐる。然し乍ら此論理を以て推論し行く時何人でもたゞなまけて暮

してゐる人がレントを取ると云ふことは全然承認出來ないことである。ラスキンとても此推論を以て正しいと考へた。然るにミルは土地の處理に就いて權限問題を論ずるに當り次の如く書いて彼の反論を買つたのである。

既に開發された土地でたとい法律の下に、何千町歩の土地を自分のものとしてゐるにしても、其の土地を利用し様が濫用仕様が將た亦どんな取扱ひを仕様が、夫れは全々自分の思ふまゝにやつてよいと言ふ風に考へてはならぬ。彼が其の土地から得るレント、或はプロフィットはどこまでも彼のものであるけれども、彼が其土地にしてならぬ事は矢張り道德上してならぬものである。若も場合によりて許さるゝことあらば、自らの利益と快樂とを凡ての人の幸福とに反せざる様法律上の責任を持たねばならないのである。

“The rents or profits which he can obtain from it are his, only;.....”

ラスキンはミルの此の句をとらへて狡猾故意曖昧と批難した。そしてヘンリーイフォーセット教授の場合も同様であると言つて『無意識に大なる誤謬をなす許

かりでなく全局面を見ないで小局面ばかりに留意し、ミルが其の自由論に於いても自由と云ふ事の都合のいゝ方面ばかりを觀て *Restraint* の反面を見ざる結果だと言つた。

自由放任より社會改良への過渡期の哲學者であり經濟學者であるこのミルですら斯く難ぜられた。家屋の賃貸料に於てラスキンは理想として非徴集を其眼目としてゐたが實際上に於ては三分又は五分の最低賃貸料を國家が立法上に規定せんことを希望してゐた。然し土地のレントに於ては彼は全然、無徴集を以て可とした。彼は土地を比較するに人間の身體と水と空氣とに交換し得べからざる財として考へたのである。

男女でもその身體はその魂と共に賣買すべきものでない。同様に土地や空氣や水は共に賣買すべきものでない。然し此等のものは或る事情の下に於てある特殊人物には一定の條件を附して之れを所有させ占有させねばならぬ場合がある。かゝる場合吾々が自分の妻を得ることを禁ずる如く土地の賣買を禁ぜねばならぬ。

故に土地に對して國家の處す可き正しき態度は一國民中の最も信用すべき人々に對して其希望と才能に應じ土地を分領せしめ國家は其分領せられたる土地を如何に取扱ふかに就いて充分の注意をすべきことは吾々が妻を如何に待遇すべきかと一般である。勿論或る程度迄は彼等の自由に任せるがよい。然し乍ら……土地を賃貸して收入を擧げたり、或ひは又「直接でない露葉でない方法に依りて行はるとも」その地代を徴集したりすることは國法を以て嚴禁すべきである。」

斯の如く *Rent of Land, a great abuse* なるラスキンの思想はラスキン著書中殊にフォルス、グラビゼラの一八七七年の一月の書信第七三に、又タイムエンドタイトの第二十三章に、又一八五四年正月五日の書信、フレデリック、フアーニバル氏宛ての中にも明らかに記るされてあつた。地代を以つて *Abolition of inevitable* と言ひ、*A form of theft by rich from poor* と叫んだのは全くラスキンの道徳的經濟觀からばかりでなく彼が一步一步識らず知らずの中に社會主義經濟學に足をふみ入れて行つた事を證するに足るものである。

ラスキンの言をまつまでもなく地代、利子利潤は、要之に「Lump Sum」の異りたる形態であつた。土地及び資本の法律上の所有者は何等の勞力を用ふる事なく此れ等の高利を收むるものである。

現今の經濟組織に於いては賃金労働者は其勞働を資本家に賣る事によりて兎も角も土地資本を利用して生活費を得る事が出来るのである。私共は此處に「Lump Sum」の高利として存在を否定する事は出来ない。そして此の犠牲者はラスキンに於いて賃金労働者であつた。

有するものが如何なる道德的根據によりて有せざる者より「Lump Sum」を奪掠し得るか。

との問題につきては

資本と労働とは財の生産に寄與するものであるから資本家及労働者は各々生産の一部分を收得する権利がある。

(三)

と主張する事により非ウズリイ論を破り得たと解したのである。何人も今日の社會状態にありては生産につき資本の必要を疑ふものはない。唯々問題となるべき事は

凡ての財は労働者の精神的肉體的労働のみによつて生産せられ労働者以外によつて生産さるゝ財は絶対にないと言ふ事である。

ラスキンは彼の「ムネラブルベリス」第五十九節に於いて

労働とは或る反對物と人間の生命が争ふ事である。正確に夫れは何等かの努力に依りてなされた人間の生命の經過喪失又は損亡の分量である。

労働は通例努力そのもの或は力の適用と混同されて居る。されど單に氣晴らし又は快樂の方法たる多くの努力もある。人體の最も美しい動作及び人間の最高の産物は全く非労働的を否娛樂的な努力の状態又は成就である。然るに労働は努力の中に苦を忍び耐ゆる事である。

故に労働は夫れ自身に價値のないものである。決して賣買し得るものではない事がアプリアリとして考へなければならぬ。夫れが賣買される商

品だといふ考へは經濟學の誤謬のアルファでありオメガである。
と述べて居る。私共はよく是れを考へねばならぬ。ラスキンの勞働商品説を
否とする思想の善惡を別として、此處に勞働と資本にウズリイなる三概念につき
て靜かに考へねばならないのである。

何故に勞働者は勞働の結果たる生産を非勞働者に分配しなければならぬの
であらうか倫理學者は宗教家は此の點について實に冷淡であつた。ラスキンの
心眼は此點にそゝがれた。彼は彼等のモーゼの第八誡に對する註釋が頗る硬い
もので且つ淺薄なりし事を嘆じたのである。

彼等は富める者に對する貧しき者の掠奪を咎責する事をよく知つて居た。さ
れど貧人に對する富者の掠奪を全く知らなかつたのである。

一八五八年二月タンブリッヂウエルズでなされた彼の講演は後に *The Two Paths*
として出版せられたが其の中に次の如く彼は説いて居る。

「吾々は他人の所得を奪ふ爲めに、或種の責道具を使用する吾々は拷問機械
を用ひる代りに、人の苦惱を利用し手にピストルを持つて脅す更りに、人の

饑饉に迫つた状態を利用する吾々の *Front de Boeuf* や *Dick Turpin* と異ふ點は
只彼等の如くに計略に巧みでなく、彼等よりも臆病で且つ殘忍なことであ
る。彼の亂暴な貴族や横暴な強盜はたゞ富んだ者のみを相手として其の
掠奪を加へるのである。然るに吾々は常に貧しいものゝ所得を盗む。」

又彼がマンチエスクーの僧正に云つた言は誠に適切なものであつた。(Ruskin,

Library Edition Vol. 29, P. 135)

僧正は其の同僚と共にその公生涯中二個の恐る可き形式に於いて惡魔の法を
教へたそして富人が貧人を盜掠するのを是認したのである。即ち彼は

第一人間の用具を買占めて之を使用するものをして其の借賃を支拂はしむ
るもの即ち利子である。

第二人間の土地を買占めて置いて之を使用するものをして其の生産に對す
る料金を支拂はしむるもの即ち地代である。と言つた。

更らにラスキンは嘗つてポーロが基督教徒に要求して「盜む者をして盜む事を
止めしめよ」と言つたのは貧人側のみならず富人が貧人より盜む事を禁戒したも

のであると叫んだ。

今之等の最も重要な倫理問題即ち(一)正當なる價格とは何ぞや(二)公平なる賃金とは何ぞや(三)高利は正義なりや等の問題に對しては單に僧侶のみならず多くの經濟學者も僅かに皮想的な獨斷説の一瞥を與へたのみであつた。

ラスキンによれば倫理學者も同じ事研究を單に心理學的及び哲學的方面に限定して善惡正邪の實際問題を論究しなかつたのである。

アダムスミスやジョンステュアートミル其他の經濟學者も此のウズリーの倫理的根據に關しては何等の説明をも試みなかつた。

彼等は單に地代利子利潤の存在する事實を論じ其の騰貴及び下落を支配する法則を發見し様と試みたのみである。そしてウズリーの道德的根源については全く何等の理論をも用意しなかつたのである。

想ふに經濟學者は經濟學の道德的方面を倫理學者の研究に任せ倫理學者もその責任を經濟學者に譲らんとせるものであつた。

ラスキンは斯くの如き事實を指摘し批難せる一人であつた。社會主義も亦是

れ等について眞摯な實行的研究を試みたものであつた。

私は再び讀者に謝罪せねばならぬ何となればウズリー是認論者の所謂「高利は危険に對する保険料である」といふ説や「高利は節制の報酬なり」といふ説に對して詳しく説明をする力もなく又是れを否定する論據につき何等の記述も不可能だからである。讀者は J. H. Smith の著 "Economic Moralism: An Essay on Constructive Economics" の第二章地代利子利潤の倫理的批判をお読み下さるべしだと思ふ。唯次に少しく私の拙筆をたどりて書いて置く。

Usury は危険に對する保険料であるといふ説は殆んど根據なき謬説である。此の問題を解決するには對資本家階級との對立を考へて見るが宜しい。此の兩者の間に貸借關係が生じた場合若しも資本家の方が損失を蒙らなかつたならば彼等は報酬を支拂ふことを要しないのである。若しも損失を招いた場合には單にその損失を償ふ丈の報酬を支拂へば良いのである。

又一個人が一個人に貸借を爲す場合たとひ資本を投ずることに依つて或る危険を冒したとしても單に高利を支拂ふといふ約束ばかりで如何にして危険を安

全に變じ又實際此に保護を與ふるを得るかといふ理由を發見するに困るものである。

若しも資本家が澤山の資本を投じて一方の損失を多分の利得で埋め合せるといふのであれば此の高利も勿論必要なものとなるのである。然し乍ら一般の現實な利息に就いては別の理由にその根拠を求めなければならぬ。

要するに高利は危険に對する保険料であるといふことは吾々の一考の價値をも有しないのである。危険に對する料金はそれが單なる保険料である以上資本を損せざる程度に於てもその損失を償ふに足る程度を越ゆることを得ないものである。

次にウズリーは節制の報酬であるといふ説は吾々資本を多少に持つて此より利益を得るものゝ金科玉條とする所であつた。然しウズリーが果して節制の報酬であるならばその報酬は疑もなく其の歸着すべき行先を誤つてゐるのである。節制の爲に苦痛を忍んだ者は私共一人の資本を有する者でなくして私共の爲に配當金を生産した某工場の多數の職工である。私に若しも地所があるならば私

といふ地主でなくして此が地代を拂ふ所の人々である。

ゼームスハールデンスミス氏も云ふ如く節制説は

資本家がその菓子を食つて同時に此を保存することが出来るといふ自家撞着を含んでゐる。彼は資本の消費を節制して節制せざると同様の享樂を擅にすることが出来る者である。

高利は節制の報酬なりといふは誠に資本主義辯護の名文句であつた。私共は今日の經濟組織に感謝しつゝ此の節制の報酬なる文句を味ふべきである。

スミス氏は二人兄弟の面白い例を引いて説明をしてゐる。此の二人の兄弟は五萬磅の遺産を貰つた。長男はラスキンの崇拜者でウズリーに對して誠に變つた面白い考を持つてゐた。そして地代利子利潤を收得せずその資本を消費して終はうと決心した。彼は誠に賢明であつたが故にその金を一度に浪費せずその金を生涯の間に段々につかつて終はうと考へた。彼はその金を以て多數の労働者を雇ひ入れその労働者と相談して自分の手に毎年千磅宛受け取ることに決めたのである。そして其を資本に對する報酬と考へて終つた。

然るに彼の弟は反對にその資本を消費せずその労働者に貸附けて年四分の利子を受取る契約を結んだ。結局彼はその節制の報酬として一ケ年に二千磅の收入を得る譯である。五十年の後に彼の兄が五萬磅を費つて終つた間にウズリーを收めた弟は労働者の手にあつた資本から總計十萬磅の利子を手得し尙其の上遺産たる五萬磅の元金をも所有してゐたのである。弟は實に富有で只彼の労働者のみ貧乏であつた。

私共は茲に冷靜に考へなければならぬ。

此の弟こそ今日の現代の階級組織の代表的人物である。後日の爲にその財産を節約して此を貯蓄する時は他人に此を使用せしむる時詐取せらるゝこともなく又損害を受くることもない。資本は段々と殖える。その勢力は段々と更新せられる。その利益は法律上資本の所有者たる地代利子利潤の取得者の手に歸するるのである。

ナザレのイエスがウズリーを罪惡と考へたことは彼の教訓の全體の主旨が證明してゐる。彼は高利が四海同胞の精神に戻ることを戒しめたる「汝返さるゝこ

とを得んと思ふ人に貸すは何の報あらんや惡人も又その如く返しを得んとて又惡人に貸すなり汝敵を愛し又善を爲し何を望まずして貸し與へよ」と云つたキリストの言葉を倫理的に解釋すれば彼は單にウズリーを否定したばかりでなく元金の返済をも期待する所がなかつたのである。

セントオウガステインでもセントアンブローズでも「高利は金錢に於てのみで收得せらるゝものと思ふ者がある。けれども聖書は此の誤解を避くる爲に特に各種の利息を否定して與へたる以上を受くることを得ざらしめた」と解釋してゐる。

資本蓄積の中にひそんでゐる殘忍の最も恐しい事實を鮮明に描いて高利の強奪を以て貧民を永久に貧乏ならしむる所以であるとしたカールマルクスの説に就いては私は何物も知らないといつて良い位である。

たゞかゝる淺學の身を以て直ちに高利即ち「地代利子利潤を收得するは不道德なり」と云ふ結論に到達する事は誠に耻ぢ入る次第である。私は再びラスキンの言葉をかゝけて自らの淺學を謝するものである。即ち彼は豫言者の熱誠を以つ

て言つた。

『正直にして常識ある人は此等の問題に付き獨力の思索に依つて眞理に到達する事が出来る。不正直非常識の人は何人の教を受くるも眞理に達する事は出来ない。若し事物の現状維持につき理窟や口實を發見せんとならば虚偽の避難所はいくらでもある。窮追せらるれば最後の避難所から最初の避難所に逃げ歸ることも出来る。然し永く議論を闘はして居る必要もなく又其違もないであらう。商業的歐羅巴の虚偽の口舌は、さう永く急迫の困窮に在る人民を欺き得るものでない。又彼等の公明なる戦争を阻止し得るものでない。何程の騒擾と流血の巷を通つて何程の火焰と灰燼の跡を越えて彼等は其勝利の凱歌を擧げ得るであらうか、又バラバスが盗賊であつて帝王でない事を知つた時彼等は彼を如何にするであらうかは勿論人知の豫め測知する所でない。唯彼の性質と地位の暴露が近づいた事及び封建制度の倒壊にも劣らない世界の大變化がそれと共に現出せらるゝ事は何人も之を覺知するに難くない』。

ラスキンの貨幣論

一、「凡ての貨幣は代表的の財にして證書である」

ラスキンは財を分ちて直接生活に必要なものと生活上の目的に必要なものと二種類に分つた。貨幣が生活上の目的に必要な財である事は多言を要しない。彼によれば證書金銭或は證書のみにて成立する所の通貨は凡て交換の手段であるのみならず此が吾々の社會に通用し此を提出すれば法律上の要求の文書的表明となりそれ自身富ではないけれども此を提出すれば社會に存在する所の現實の財産に就いてそれに相當する一定の利益又は便宜を要求する事の出来るものなのである。(ラスキンのポリティカルエコノミー
オブアーツ補稿第八參照)

それ故に彼によれば貨幣はそれ自身富ではないけれども富の比較的數量の記號又は富を生産する勞働の記號となるものである。

若し世界中の凡ての貨幣も金貨も忽ちに破壊されたとしてもそれによつて世界は別に富みもせなければ貧しくもならない。只斯の如くなれば一人々々の人間が前と異なる關係に立つのみである。(ラスキンのムネラブル
ベリクス第二十一節參照)

彼によれば貨幣と云ふものは此によつて要求し得る財産が現實的のものであり又此によつて得られる便宜が確實的のものである場合に限り始めて純粹なものとなる。若し然らざればたとひ政府が発行したものであるも、確な銀行の発行したものであるも個人の発行したものと同様に贋造貨幣となるのである。

完全なる通貨は必ず支拂はれなければならない債務を代表してゐる。従つて債務者の手に存する富、或はその能力或は快諾の意志を代表するものであり普通の増加は此に比例する債務を代表し同時に富の増加を意味するものが正當である。

斯の如く凡ての貨幣は證書であるが故に斯の如き貨幣を無限に発行するといふ觀念は最も誤れるものであつて國家的政策として誠に無謀且つ荒廢したものである。一國の通貨は負債を承認し國內に於て轉々し得る所のあらゆる證書から成り立つてゐる。本來ラスキンは貨幣と通貨とに區別を設けないものであるがたとひ金銀に印刷したものであるもその記號によつて用ひられてゐる限りそれは證書の部類なのである。

二、「通貨として價值あるものを使用する事は野蠻である」

通貨として黄金や寶石や實價あり又は想定的價格あるものを採用するのはラスキンにとりては野蠻であつた。

此の事は同時に自己の政府に對する社會の不信用及びその國民が平生如何に不信用な野蠻な國民と取引してゐるかといふ程度を示すことになる。通貨の材料として固有の價值あるものを使用するは一種の野蠻的行爲である。未開なる國民間に商業を可能ならしめた所の物々交換の遺物である。けれども其は今も尙一つに氣儘な貨幣發行の機械的抑止として又一つには異國民との交換の手段として必要である。

彼は容易に腐敗せざる金屬或は模造の出来ない金屬は色々な便利な點に於て通貨として適當な材料であるけれども若しも贋造さへこれを防止することが出来るならばもつと價值のない金屬が通貨としては適當であると云つてゐる。價值なき地金の使用は必ず無制限或は少くとも不相應な多額な貨幣の發行を

惹起し又將來も惹起する怖があるとはラスキンの想像した所である。然し乍ら斯の如き理由を以てすれば言葉と云ふものは更に價值もないものであるから約束手形は更にそれ以上の濫發を來すことがあると結論しなければならぬ。國と國との取引は現状の儘で推進む時將來もやはり貴金屬の正價を以て行はれなければならぬ。斯の如きは物々交換の一形式である。

現在通貨として用ゐてゐる所の金は事實上少しも通貨ではない。通貨が要求してゐる所の現實の財産にその價格の表記されたまでのものである。そして此が物々交換によつて眞の通貨と混合されて使用されてゐるのである。

金に對する人間の慾望は其が通貨の基礎であると云ふ理由によつて一層強められてゐるのであるが交換の要具としての金を得んが爲に費される勞働は實に馬鹿らしきものであるとラスキンは云つてゐる。

現在通貨として使用されてゐる金は現實の財であり或は寧ろ斯の如き現實の財に相當すべきものである。何となれば吾々は金を以て最も價值あ

るものと看做してゐるからである。吾々は金に對して勞働や物品を交換せんとする。

然れども現實の財は獨り肉體や精神を養ふものばかりではない。若しも吾々が此を以て肉や書物を買ひ得ないとするならば金も遂には何等の役をもなさぬものとなるのである。要するに凡ての商業上の困難と過誤とは吾々が自ら働かないで物品を獲得し又は獲得したものを空費することから起るのである。よく働いてよく其の結果に就き十分の處理をなす國民はたとひ金といふものがなかつても必ず富み且つ幸福である。

ラスキンは斯の如く金の通貨としての價值を僅少に認めてゐる。

金は其が通貨の基礎となつてゐる場合は通貨並びに商品として共に其の力を一部分は失ひ或一部は又増大するものである。

ラスキンによればその交換價值が實際の使用を妨害する故に其が通貨である限りに於ては悪い商品である。其は商品である限りに於て悪い通貨である。何となれば賣られる怖がある。又其は固有價值を認めらるゝ限りに於てはよい通

貨である。何となれば何處でも此を受取ることが出来るからである。そして其が法律上の交換価値を有する限りに於て其の商品としての価値は増大するものである。(ムネラブルベリス) (第七十五節参照)

三、「貨幣の否定即ち金錢に對する罪惡觀」

土地を奪はれ資本としての道具を奪はれた人間は現代資本主義組織の状態に於て其の金錢の必要上から各自の勞働を賣らなければならぬ様になつたことはラスキンも認めてゐる所である。斯して彼等は貨幣といふ物品の爲に金錢をゲインとする爲に如何なる罪惡をも又困難をも此を忍ばなければならぬ事となつたのである。斯して貨幣は或る程度迄人間を奴隸にした。貨幣制度は新しい奴隸制度である。

トルストイは嘗て金錢を最も大膽に否定したものである。彼は金は害惡そのものであると説いた。彼は金錢の使用の不合理といふものを説き同時に一般に富といふものを否定し財と云ふものを否定したのである。實行上に於てはトル

ストイは財を否定せず富を否定せず金錢の存在を否定せざるラスキンに及ばざる遠きものがあつた。

茲にトルストイの人間の弱味がありラスキンの人間の強味があつた。

金錢は神がその下僕に對して此を利用する爲に與へたのである。然るに此を利用する事を知らぬ下僕は空しく地面を掘つて神の寶を埋めて終ふ。吾々は此の教訓を詩的乃至精神的に應用して次の如く云つてよからう。即ち金錢とは物質的のみの金錢の意ではなく其處に才智や高尚な力を含むものであつて金錢以外のあらゆる力を意味するものである。吾々は才智を持つてゐれば勿論同胞人類の爲に此を使用する。然し吾々の凡てが其れ程の才智を神から附與されてはゐない。若しも吾々に教會の改良を計る力があり政權を掌握する丈の力があるならば吾々は此を利用して國民の福利を増進することであらう。然し乍ら吾々には斯の如き能力を附與されてゐないのである。

今も昔も吾々人間共は多少なりとも金錢を所有してゐることは確實であ

る。然し乍ら吾々が金錢を作るに用ひた其の力は即ち吾々が先に神から與へられた才能であるといふ智力又は體力を應用したものに過ぎないものである。

愚なる人々は何故に此の世に生れたか。吾々は彼等を蹂躪し貧乏に餓えしめ此を散々に利用する爲ではないのである。此は實に強者賢人が其の周囲の社會に對する關係上彼等を扶助し指導せんが爲なのである。吾等富める者が指導者たるの責任を負ふて多くの労働者の正當なる支配をなしよく此を統率し相當に己れの面目を保ち其の聰明なる行爲に伴ふ所の當然の報酬たる金錢を取得することを得ば吾々の事業は更に大なるものとなるのである。

金錢は労働を代表すると云ひ其を取得した人々によつて爲された所の労働を意味するといふ古い原理に對してはラスキンは全然否定したのである。金錢は吾々の日常の働きに對する相當の貨金であつて神から賜つた才能ではない。然れば吾々が金錢を働き出して此を取得し得れば勿論其を自分の勝手に使つてよ

いと迄はラスキンは主張しなかつた。然し乍ら他面に於て金錢は實に人心的奴隸の變形であり非制服者に對する制服者の利用の形式が進んで來た結果である。然し新しい奴隸制度であると迄も極論はしなかつたのである。

既に私が述べし如くラスキンは世界中の凡ての貨幣も金貨も全部滅失されたとしてもそれによつて世界は富みもしなければ貧しくもならないと云つた。

富といふ字義に就いては彼は何時も倫理的の解釋を下してゐたが故に貨幣の價値とか又は力といふものに就いても國民の道德的乃至藝術的評價能力の表現と見たものである。

斯の如き貨幣觀は果して正當であるか否かは私の知る所ではない。只彼は「通貨が或る一定の貨物の一定の分量に對する手形の形式として見るべきものであつて其の一定の貨物を金とすれば他の貨物の凡ての分量の價格は其れ等の貨物と金との關係によつて定めらるゝのである。従つて通貨其の物の價値は其が要素たる或は要求し得る貨物の價値に基礎を置く」と等しく金を以て交換し得る他の凡ての價値に基礎を置くものであると云つてゐる。

又ラスキンは「或る貨物の價值又は需要の變化は其の外の凡ての貨物の價值又は需要に直ちに影響して其を變化せしめる。斯くて通價の眞の力或は價值は其を所有する人々の比較的評價の全額を基礎とするものである。而して其の評價の方向の變化する事は即ち國民の品性のあらゆる變化は勞働を支配する力としての貨幣の第二の大作用に於て貨幣の價值を變化せしめるのである」と。

吾々が金錢其の物を否定することは理論上殊に難しいことであると思ふ。敢て唯物史觀による譯でないけれども歴史的金錢の存在を否定し習慣として金錢の使用に慣らされた吾々は經濟學の金錢に對する是認を破壊することは至難のことであらうと思ふ。

然れど金錢其の物の背景に就いて吾々が觀察することは理智的にも感情的にも許さるべきことである。

金錢の主觀的背景其の倫理的背景に就いては吾々はラスキンによつて此を學び得るものである。

ラスキンとタナー

及ラファエル前派

拙著「經濟的美術觀」には、ロゼツチとラスキンの關係を記載して、少しく「ラファエル前派」論に入つた。淺學自らに心にほんとうに耻づる私は彼のラファエル前派論を論ずる事は未だに出來難い仕事である。

此處に論ずるところのものはラファエル前派論の一小部分に過ぎない。殊にターナーに關係せしものゝみを綴りしものである。

ラスキンのラファエル前派論には二つある。勿論 Pre-Raphaelism の運動や其の細かな點に至りては、廣汎なる彼の著書中の至るところに散見せられるが彼の系統的な論說としては第一に一八五一年八月に書いた「ラファエル前派論」である。夫れはターナーの死んだ日十二月十九日に出版された。第二は一八五三年の十一月エディンバラにてなされた建築及繪畫に關する連續講演の第四講であつた。次に私共の参考とすべきものは近世畫家論のターナー辯護論である。

ラスキンの自叙傳 *Præterita* によれば彼の繪畫をけいこしたのは十歳の頃である。一八三二年十三歳の時始めてターナーの繪を見て感動したと言ふ。彼が父と共にターナーびいきになつたのはこの以後だつた。その十七歳ブラツタウツ

ドマガジンが「自然を無視せるものは實にターナーなり」と悪評した時彼は大いに是れを辯駁した。この論文が *Modern Painters* の第一章となつたのである。

“The Magazine (review) raised me to the Black Anger” Praterita

ラスキンはターナーに對する冷評に對して餘程おこつたものらしい。一八三六年十月クイーン・アン街に住つて居たターナーにラスキン父子は滿腔の同情を表した手紙を書いた。ターナーは非常に嬉れしかつたろう。

「我が親しき友よ、あなたの親切と熱心に謝する事を許るせ。私の作をかくまで主んじブラツクウツドマガジンの冷評に對して御身を惱ませし事を心より感謝せしめよ」

是れはターナーがラスキンにあてての返事である。

嘗てエミール・ゾラがロマンティズムを捨て、自然主義に奔せた時、マネーやセザンヌは理想派を嘲つて印象的繪畫を描き、その爲めにサロンより排斥せられた事があるときく。

私は今ゾラとマネーの親しい關係をラスキンとターナーに見出したのである。

一八七九年以後ターナーの師は主としてレイノルドであつた。彼は言ふまでもなく他日風景畫の偉業を創始したターナーに影響を與へたのである。然しラスキンによるとターナーには彼自體の *Original Character* があり、決してレイノルドの感化を認められないと評されてゐる。第三者は是れを評して、ラスキンの過讚であると言ふ。私にはこんなことはどうでもよい、たゞ該博なラスキンの批評乃至辯護が、たとひターナーに取つてありがたき禍であつたとしても、夫れが *Turnerian Mystery* とまで讚美されて藝術界の美談として存在すれば結構である。

ラスキンによればターナー (Turner) は一つの山又は岩石を本當に描寫することの出來た只一人の畫家である。彼は眞に樹幹を描くことの出來た只一人の畫家であつた。又眞に大空を描き得た只一人の畫家である。今日までの畫家は只類形的に或は部分的に描いたけれども彼は根本的に且全體的に描いたのである。嘗てラスキンがターナーの岩石描寫を稱讚した時彼は單に面白さうな岩石を此處彼處から求めて描寫はせず、全體ままとまつた事實を示してその各部分の關係を明らかにしてゐることを説いた。そして本當に眞實に偉大な人とは何事をも

充分に仕上げて本當に手を盡す人である。そして神の作つたものならば如何に小さなものでも輕蔑しなかつた人であると云つた。

ウォーズワースの雛菊がその影を岩の上に落してゐる如く英國の畫家も此處まで來なければその本分を果したとは云へないと附言した。

ラスキンがターナーを推賞するのは彼の與へる Truth と Finish との爲であつた。而して彼がラファエル前派の人々を推賞するのは全く此の一派の與へる所の眞と完成との爲であつた。

ラファエル前派の人々はどんなに小さな部分と雖も嚴格に自然から描くと云ふことにあつた。ロゼツチにしてもミレーにしてもハントにしても夫々皆んな互に異つた個性を持つてゐた。彼等の個性の閃は各々その色彩を異にしてゐるけれどもそして彼等は各自にその記憶と Imagination によつて描いてゐるのであるがその記憶をば肖像畫の様に見える程正確に表現してゐるのである。又彼等の想像をば記憶の如くに實現するといふ點に於て此の派の人々は一致してゐるのである。

ラスキンがターナーを讚美したのは彼が偽の美を排斥した點にあつた。偽の美は人々をして高貴なる眞實性を忘却せしめ或は輕蔑せしめるのである。

嘗て或る讀者がラスキンに向つて貴下はどうしてラファエル前派とターナーとを同時に賞讃することが出来るかと問ふた時に彼は

Herbert の詩

Some men are full of themselves, and answer their own notion.

を掲げて彼の著述の初から今日に到る迄彼がターナーを賞讃するのは彼が他の人々よりも事實を一層正確に示す爲即ち一層ラファエル前派的に表現するに他ならないと答へた。

ラスキンの眼に映じたターナーは決して抽象的な漠然とした空想的な畫家ではなかつたのである。彼は確實にして非空想的な人であつた。彼は冷靜にして明析であつた。

ラスキンは云つた「ターナーの作品はその最も小さな形式に於てさへも眞の價値の Reality がある。そしてラファエル前派の極めて誠實な特質は彼等の Imaginative

Powerの充實から生れたものである」と。

ラスキンに依れば偉大なる藝術は自然を變更することでもなく自然を改良することでもない。自然の到る處に凡そ美しいもの凡そ誠なるもの凡そ清らかなものを求めて此を愛することである。

その美しさを出来る丈發揮して出来る丈立派な技術によつて此を觀賞する人の思想をその方へ惹き附けることである。美を愛する爲に眞が犠牲にならないならば凡ての藝術は畫家が美を愛する程度に比例して大となるのである。

ラスキンがラファエル前派以前にターナーがあると云つたのもターナーの藝術が完全な調和に於て最も多量の眞實性を含んでゐたからである。藝術がもしも自然の眞實性を含むことが出来るならば誠に結構なことである。

藝術家が若しもその藝術に必要な眞實性を第一に選擇し然る後漸時に成る可く此れに聯絡ある Truth を選擇しその結果成る可く大なる調和した總額を得ることに努めるならばその藝術は偉大となるのである。

最も勝れた藝術には皆特色がある。そしてそれは本當に理想畫でなければな

らない。

ターナーの畫は凡て Inspiration によつて出来上つた理想畫である。彼は一瞬にして理想の姿を凡ての眞實性に於て認めたのである。

彼の想像力のあらゆる勝れた働が純粹の Truth の發見と理解とに努めた結果である。彼は出来る丈尊さと明瞭の度を強める爲にその眞を排列した。

ラスキンはターナーを讚美して彼の繪畫は常に統一して秩序整然たるものがあると云つたのも此の爲である。

斯の如きをラスキンの最高藝術とすれば彼の所謂最下等の藝術とは似て非なる模倣であつた。即ち無意義な統一、虛無の排列、目的のない秩序、生命のない一致、愛情なき法則、照らすものゝない光明、光を助けざる陰影に過ぎないものである。此を要するに Conventional な意義に於ける美や斯の如き美から生るゝ所の快樂を求めぬ心は寧ろ藝術を俗惡にするのもである。

ラスキンは斯の如き美術を排斥するが故に一八五一年の Pre-Raphaelism とする論文の中にも Manliness and Truth を排斥せる美の存在を否定したのである。

思ふにラスキンの藝術上の理想は自然主義に立脚した。然し乍ら彼の自然主義は決して Imagination 即ち想像性を無視するものではない。寧ろ彼は個性的な Imaginative Power の自由な活動を重んじたものである。次のラスキンの記載は簡明ではあるけれどもその當時に於けるラファエル前派の地位を説明し最下等の藝術と最高の藝術との中間に位する Pre-Raphael 派の將來の理想を指示したものである。

此の二つの中間に位する所のはたとひ最高と迄は行かなくとも健全快活にして高尚な自然より單純に描寫する所の藝術である。現今のラファエル前派が此の中間に位する限りは吾々をして古代の虚偽と技巧とを脱せしめる點に於て可なりに立派な仕事をするものである。然し乍ら彼等は單純にして快活なる實用藝術といふ一の標準以上に到達することは出来ないものである。彼等が偉大なものとなる爲には自然を忠實に寫す上に更に Imagination の要素を附加せねばならないのである。斯の如き理由から私はエディンバラ講演の結末に於てもラファエル前派

ラスキン研究終

は單に自然模倣に止つてゐる間は最高藝術を得ることは出来ないと言つたのである。然し乍らその最も秀でた作品の中には殆んど無意識的に此の缺點を補つてゐる資格を持つものがある。(ラスキン著近世畫家第三)

(第十章第二十一節參照)